

578-138



1200600099538

578

38

景八本目

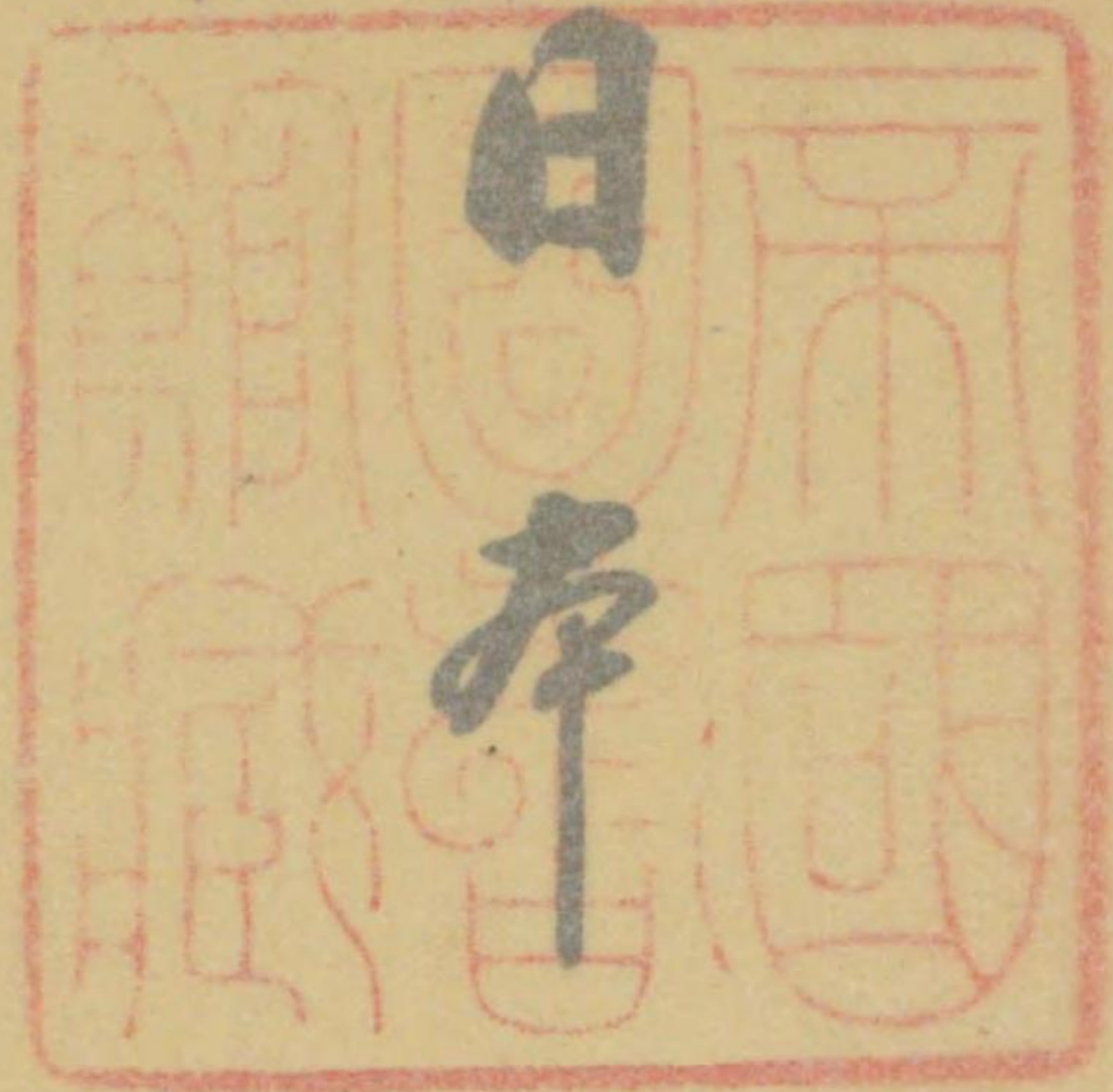
筆執家大六十

社開新日報版大
社開新日報京東
編 編



Handwritten text in red ink at the top of the pages, consisting of several lines of cursive script.

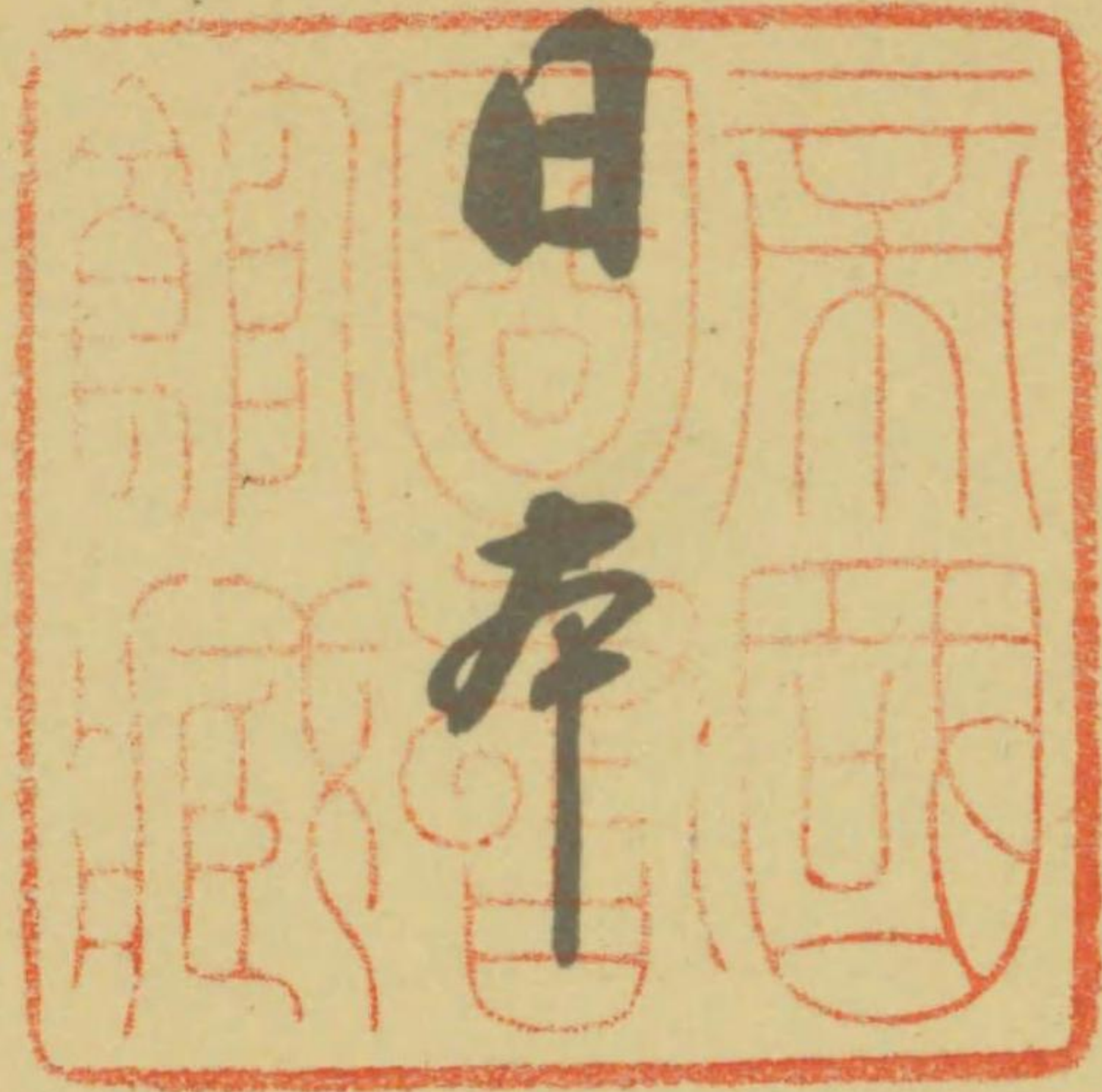




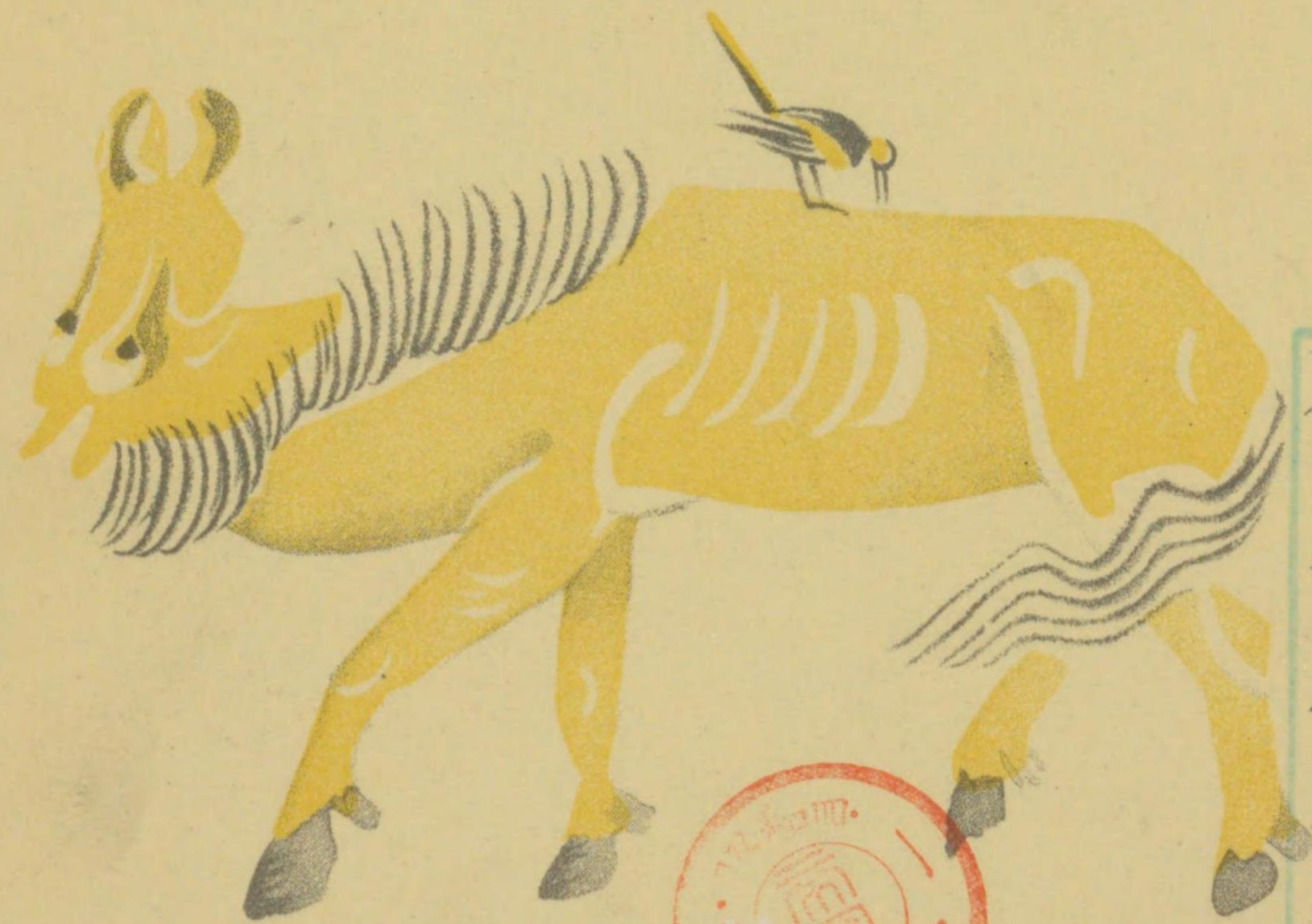
八景



鐵道



八景



鐵道者

寄贈本



和田三造畫伯裝幀



華嚴の瀧
横山大觀筆



大
和
三
造



和田三造畫伯裝幀



大山
親

華嚴の瀧
横山大親筆

和田三造畫伯裝幀



上
高
地

山
元
春
舉
筆





上
高
地

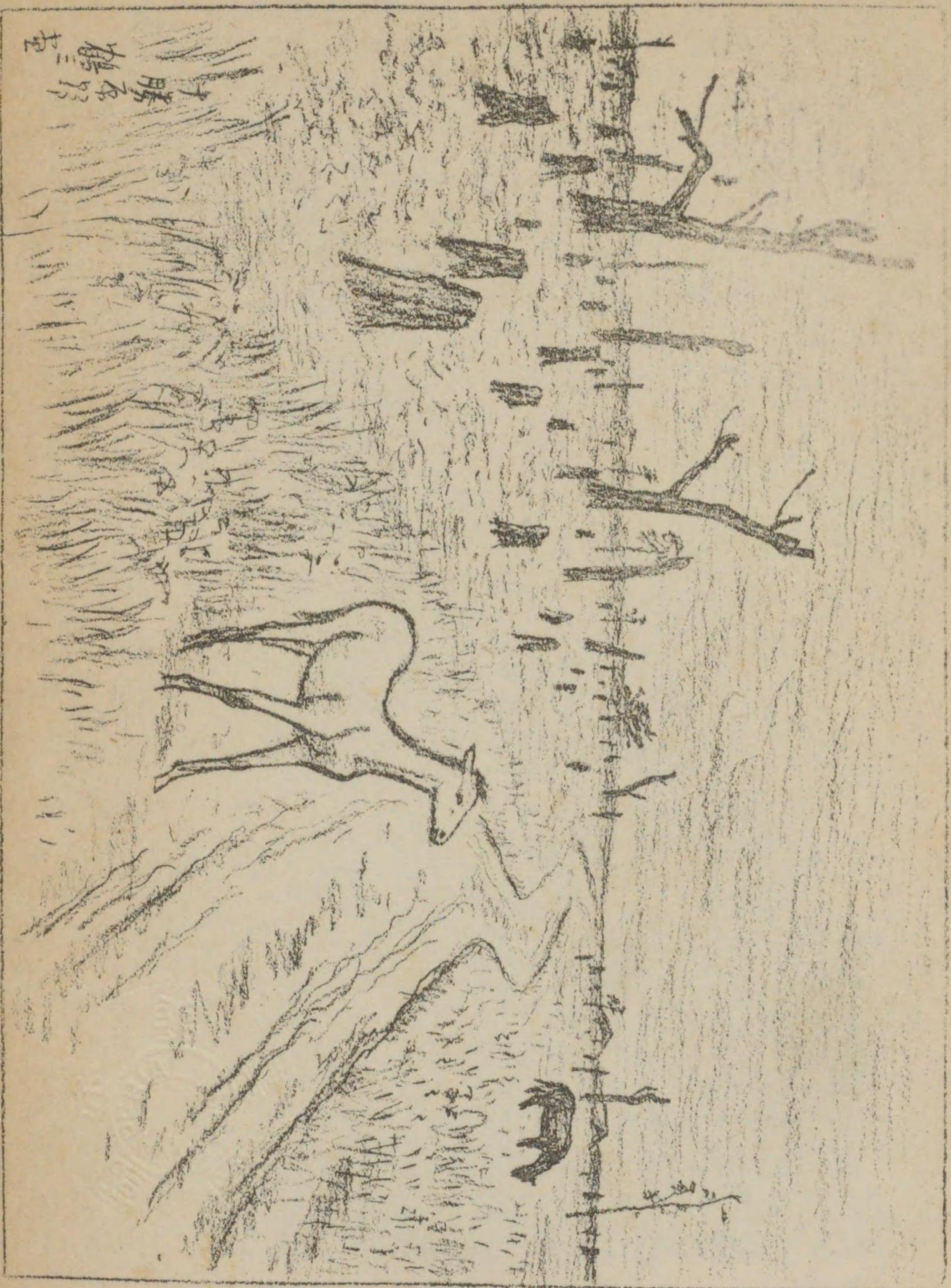
山
元
春
舉
筆



狩
勝
平
原

狩勝平原 石井通三筆





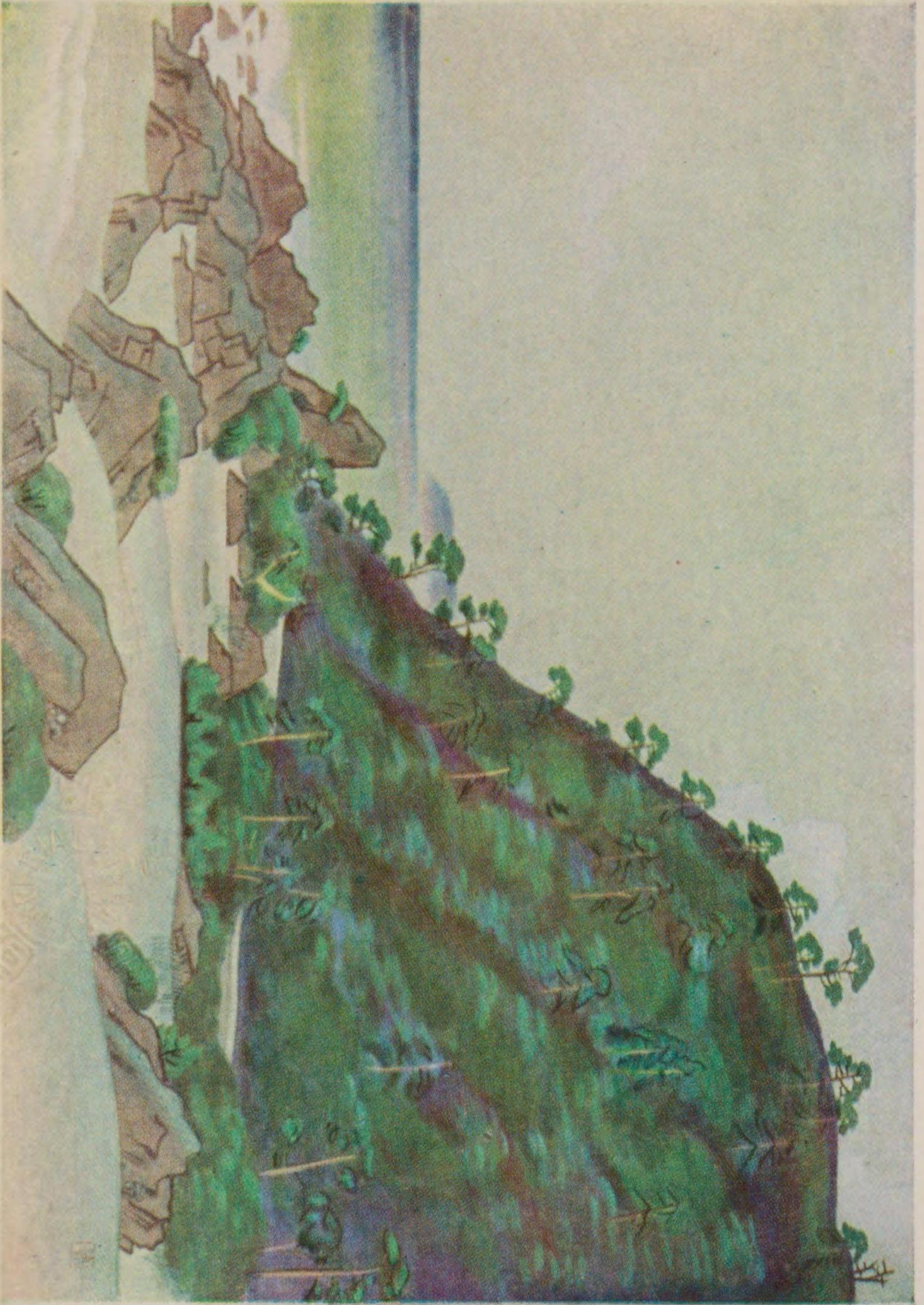
狩勝平原
三筆

狩勝平原 石井鶴三筆

室戸岬 松岡映丘筆



室 戸 岬 松岡映丘筆



木曾川 藤島武二筆





木曾川 藤島武三筆



別府風景

堂本印象筆





別府風景

堂本印象筆



千々岩砂濱と温泉寺
富田溪人

千々岩砂濱より
雲仙ヶ嶽を望む

富田溪仙筆



千々岩砂濱と温泉
富田山人

千々岩砂濱より
雲仙ヶ嶽を望む

富田溪仙筆

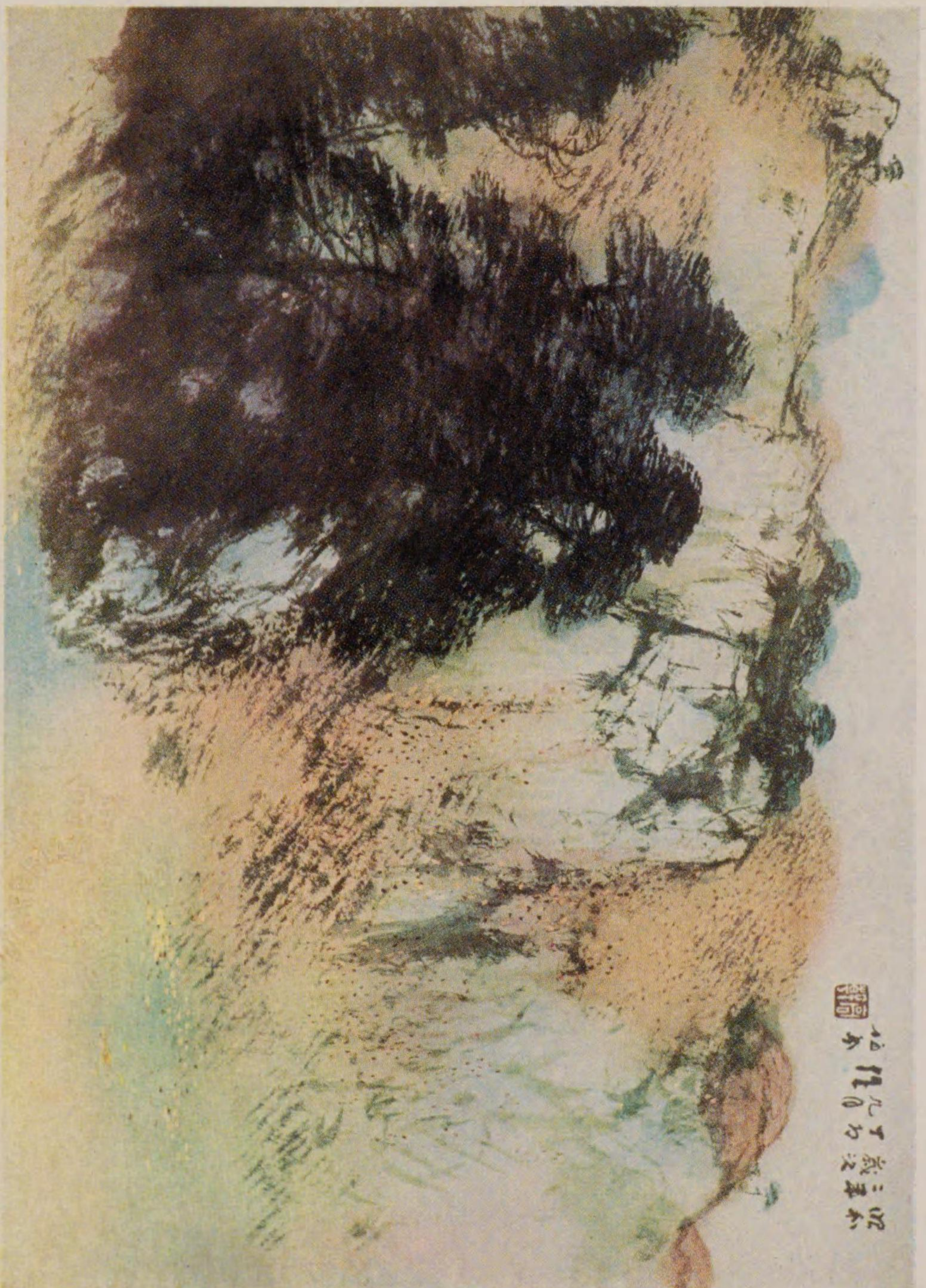
十一 和田湖 竹内栖風筆



和田湖
竹内栖風



十和田湖 竹内栖鳳筆



昭和三年九月廿一日
竹内栖鳳画

序

大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が、鐵道省の後援の下に、昨夏、日本内地における新景勝地推賞及びこれが紹介の理由を以て、日本八景廿五勝並びに日本百景を選定したことは、普く世間の知るところであります。

しかもこれが選定に當りましては、官界、學界、藝術界、その他各方面の有識者を、選定委員として網羅したのみならず、各委員は、大衆の推選に基く各風景地に對し能ふ限り、實地踏査を重ねて、その勝地認定に萬全の努力を拂つ

たのであります。したがつて、かくて、選定せられたそれ
 ぞれの勝地は、大衆の推選と、識者専門家の裏書きと、兩々
 相俟つて、眞に權威のあるものといはねばなりません。
 本書は、即ち、その榮譽ある日本八景に對する各大家の
 紀行文をとりまとめたもので、風景國たる日本の、しかも
 その最先端に位地するものを、今、こゝに、秀麗典雅な八葉
 の挿繪と共に、普く江湖に紹介し得ることを、大きな欣び
 とするものであります。

昭和三年四月

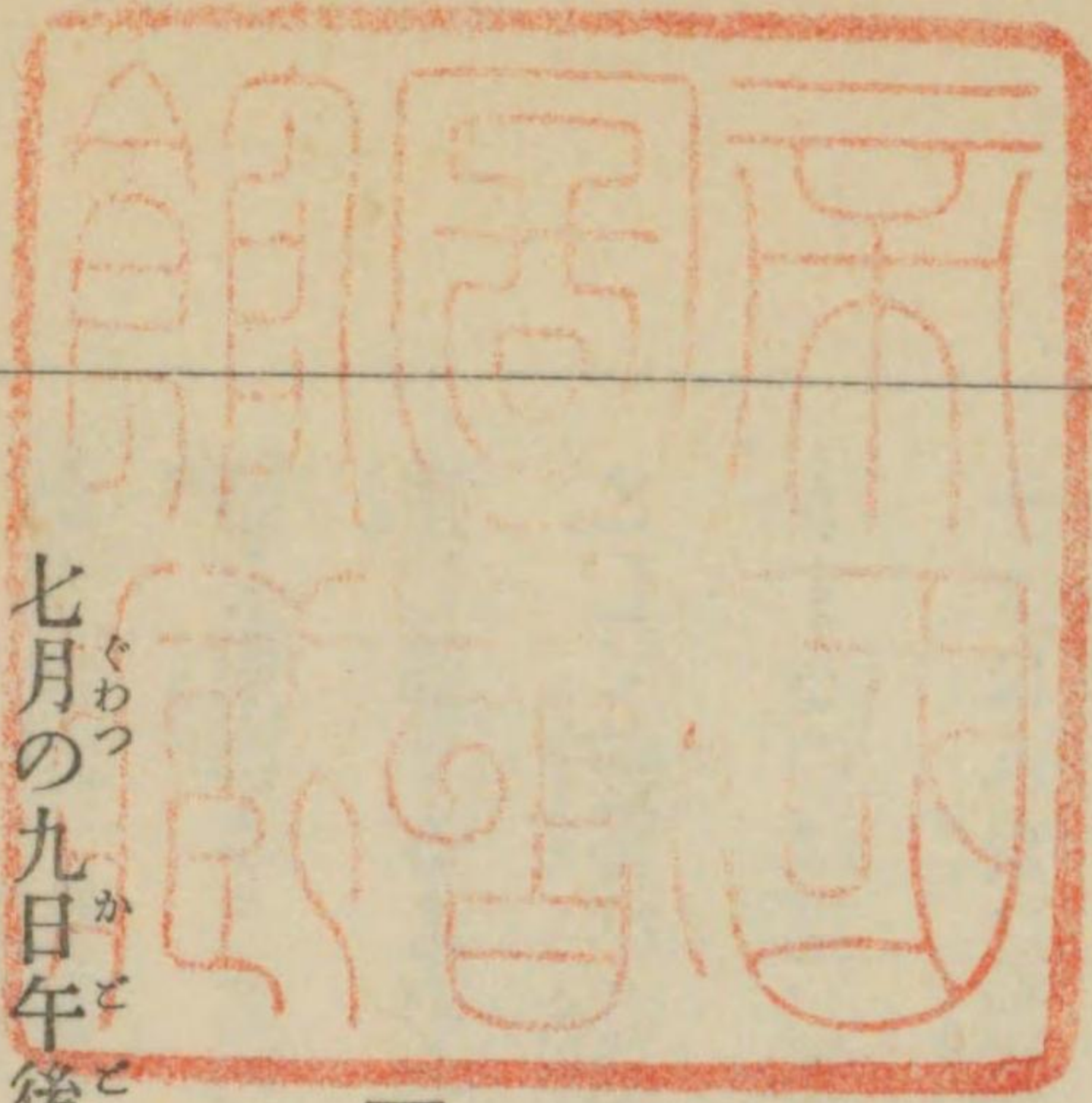
編者誌す

日本八景紀行目次

華	嚴	瀧	幸	田	露	伴	一
上	高	地	吉	田	絃	二	兜
狩	勝	峠	河	東	碧	梧	桐
室	戸	岬	田	山	花	袋	一九
木	曾	川	北	原	白	秋	一五七
別	府	温	泉	高	濱	虚	子
							二五三
雲	仙	岳	菊	池	幽	芳	三〇三
十	和	田	湖	泉	鏡	花	三七九

華嚴瀧

寺田宏樹



七月の九日午後一時過ぐるころ安成子の來車を受け、かねての約に従つて同乗して上野停車場へと向つた。日本八景の一と定められた華嚴の瀑布およびその附近景勝遊覽のためであつた。

二時五分の日光直行の汽車はわれ等二人を乗せてはしり出した。車窓の眺めは例によつて例の如してあるから退屈の余りの時間を雑談に消すほかはなかつたが、安成子は職分に忠實なので、しきりに八景論を提出して老人の談話を引出さうとつとめる。景勝など、いふものは論談の對象にするには聊か宜し過ぎるものであつて、山にしろ、水にしろ、たゞこれに打ち對つて怡然として神喜び心樂めばそれで宜いので、甲地乙地の比較をしたり上下をしたりするのは第二第三の余計な事で、眞にいはゆる蛇足を描くものであるからナアに八景は勿論好いサ、二十五勝もまた勿論好いサ、百景の中へ入れられた地にも中々好いところがあるのサ位に片づけてしまつても、それでは先生承知しない、風景論の投縄を頻に投げ掛けて、野馬的に勝手氣隨に奔逸した

がる老人の意馬の頭を主要問題の方に向はせようとする。とう／＼八景の談に引張りこまれてしまつた。

一體八景といふのは随分長い間の流行言葉であつて、何八景彼八景、しまひには吉原八景、辰巳八景とまで用ひられて、「ふけてあふ夜は寝てからさきの」などと、イヤハヤ途轍もない邊にまで利用されるに至つたほどであるが最初はこれも矢張り支那文學美術すべて支那の影響を受けた頃に起つたことである。八景といふ字面は唐あたりからある。イヤ景色に八ツを取立て、いつたのは南齋の沈約の八詠樓など、或はもつと古いところにあるか知らぬが、金華の元暢樓に沈約が八篇の詩を題してその景色をほめたところから、後に八詠樓と人が呼んだ。李太白が金華開八景と吟じたのも即ちその八詠樓の

事ことで、任華にんくわといふ男をとこが太白たいはくに寄せた詩しに、八詠樓中坦腹えいろうちうたんぷくにして眠ねるといふ句くの
 あるのも即すなはち同おなじその元暢樓げんちやうろうをいつたのである。又またたゞ單たんに八景けいといふ字じ面めん
 は別べつにあるが、それは三元げんや三清しんといふ言葉ことばと對ついになるので、景色けしきの事ことでは
 ない、黃庭くわうてい内景ないけいなど、いふ景けいの字じと同おなじ意味いみに用もちひられたもので、人ひとの身體しんたい
 に上部じやうぶ中部ちゆうぶ下部かぶの八景けいがある、上部じやうぶの八景けいは腦なう、髮かみ、眼め、耳みみ、鼻はな、口くち、舌した、
 齒はであるといふのであつて、道家だうけの語ごである。そんなことはどうでもよい。
 が、古ふるい詩しの句くの八景けいといふのは、この道家だうけの語ごの八景けいを知らぬと解かいがとゞ
 かぬやうになる。今いまの何々なに八景けいといふのは白石手簡はくせきしゆかんに八景けいのはじめは宋人そうじんか
 元人げんじんかにて宋復古そうふくこと申もうす畫工かくこう云々うんとあるが、それは夢溪筆談むせきひつだんに出でてゐる度支たくし
 員外郎ゐんぐわいらう宋迪そうてきの事ことで平沙落雁へいさらくがん、遠浦帆歸えんぽはんき、山市晴嵐さんしせいらん、江天暮雪かうてんぼせつ、洞庭秋月どうていしうげつ、瀟

湘夜雨しやうやう、煙寺晚鐘えんじばんしやう、漁村落照ぎよんらくしやうこれを八景けいといつて得意どくいの畫かくであつたといふの
 である。後のちの八景けいといふのがこれに基もとづいてゐることは疑うたがはれない。美術天
 子しの宋そうの徽宗皇帝きそくわうていが、張戢ちやうせんといふ畫人かくじんをして船ふねに乗じやうじて往ゆいて山水さんすいの勝しょうを見
 て八景けいの圖ずを作るやうに命めいぜられたといふことも、傳つたへられてゐる談だんである
 から、八景けいのはじまりは宋そうであつて、そしてその山水さんすいは平遠山水へいえんさんすいであつたこ
 とも疑うたがはれない。
 我邦わがくにでは東山ひがしやまの頃ころ、玉澗ぎよくかんの八景けいの畫かくが珍重ちんちゆうされて、それから八景けい々々くとい
 ひ出だされたのだが、その玉澗ぎよくかんの八景けいが宋迪そうてきの八景けいから系統けいどうを引ひいたものであ
 ることを想像さうざうされるに難かたくない。それからその後慶長元和ごけいちやうげんなの頃ころ、京きやうの圓光寺えんくわうじの
 長老ちやうらうがゆゑあつて近江ちひみ整居ちつぎよの時とき、琵琶湖附近びわこふきんの景けいを瀟湘八景せうしやうけいに擬ぎして當時たうじの

人々から詩歌などを得た。それがいはゆる近江八景のはじまりだが、白石でさへ、好い景色は何も八景には限らないとだのに、景としては、夜雨、秋月、歸帆、落雁ならぬはないのは、餘り不雅なとである、と厭はしく思つてゐる。も一つ又八景については、徳川期最初の大儒の惺窩先生がその市原山莊に八景を選んで人々の詩歌を得たことがある。そんなこんなで八景といふことを段々人がいふやうになつたのだが、その市原山莊の八景沙汰も契沖は雑々記に餘りよくはいつてゐない。とにかくに江戸期はこんな譯で、八景を選むとは大流行を來し、少し眺望が好いところは何八景彼八景といつたものだが、いづれも復古や玉潤の餘睡で、有難くないことだつた。ところが今度の八景はすつかりさういふ古軌道にあづからず、新眼新選、廣く大八洲内から八勝を

選んで、一景一面目、各その美を揚ぐるやうにせしめたのは景色觀賞においての劃時代的記録を作つたもので甚だ愉快である。と、こんなことを語つたり思つたりしてゐる中に、晴れたり曇つたりする日の右手の車窓には梅雨の雲の間に筑波の山が下總の青田の上、野州の畑の上から美しいその姿を見せ、左方の日光つゞきの山々はなほ薄雲の中に隠れてゐて早くも宇都宮に着きやがて日光驛に着いた。

停車場を出ると直に自動車に乗つて山上へと心ざした。本來今市から日光までの路は、例の杉並木の好い路であるから、汽車で乗越すのは惜しいのであるが、時代を逆行させて、白地の夏の衣の袖さへ青む杉の翠の蔭を煙草のけむ吹きながら歩くむかしに返すとも出来ないことであるから是非ないとして

日光へは一夜宿つて東照宮其他を拜観すべきであるが、それはすてに二人共に幾度か済ませてゐることもあり、今度の目的でもないから、いきなりブー／＼と山へ上つたが、馬返しまではたゞ一ト飛びであつた。それから地名があらはしてゐる如く山路ははしくなるので、道路は文明のお蔭で汗も流さず車中に安坐しながら登り得るものゝ、時々急勾配の電光形状の屈曲角になること、車も一寸逆行して方向を鹽梅しなければ登れぬところもあつて、山嘴突端の逆行は、餘り好い心持ではない。けれど日光自動車に事故はかつてないといふ歴史を信じて談笑してゐる中に、般若方等の瀧徑も後に、段々樹深く山深く入つて、溪沿路は殊更に夕霧の深くなる中を大平へ着いた。

霧は可なり濃くなつて何もはつきりとは見えぬ、夏の長日も暮かゝつて來

るので、わが乗つた車の轟きも或時は奇妙に反響して、瀧の轟きが聞こえるのではないかと疑つたりした。大平と聞いたので車をこめて下り立つた、瀧見台へかゝつた。こゝは華嚴の瀧をその三分の二位の高さに當るところから望むところて卅年も前には、人々はたゞ大抵こゝから瀧を見るのみであつた。古い記憶は丁度今起つてゐる霧の立隔てゐるやうになつてゐるその中をたどつて瀧を見るべき突端に至つた。客を接する人もをらず、岑閑とした霧の暮にあらう金網を張つてある危ふげな突端に至ると、一谷呀然として開けて、たゞ白煙蒼霧のうづめてゐるかなたに、恐ろしい瀧音が不斷の響きを立てゝゐるばかりであつた。心當てにかなたと思はるゝ方をじつと見てゐると、眞白な霧の中に薄々と薄青い絹を下げたやうにそれどうなづかるゝものが、かす

かに透かして見えた。山氣と嵐氣と暮氣とは刻々に懷に迫つて幽奥の境、蒼茫の態、一聲鳥だに鳴かず、千古水いたづらに落つる景、丁度人去つて霧巻くこの時に會つて、却て原始的の狀を味はふとは出來て幽趣なきにあらずてはあつたが、これだけでは仕方がない、いづれあとには又明日と、車に上つた。時計を見ると七時五分であつた。そこで東京上野からは正しく僅々五時間て八景の一たる景勝が連接されてゐると思ふと、莞爾として満足欣快の感のわき上るのを覺えた。五時間である、僅に五時間である。それで海拔四千尺の地に、直下七十何間の（七十五丈ともいふ、説はまちく）大瀑布に對し、白樺や山毛櫸や唐松の梢吹く涼しい風に烟蘿の揺ぐ下に立つことが出来るかと思ふと昭和の御世がもたらしてゐる文明が今のわれ等を祝福してゐてくれ

ることを誰も感ぜずにはをられまい。

車は忽ち電燈の光の華やぐ旅館の門並の前を過ぎて朱の鳥居の見ゆるところに來た。中禪寺へ着いたなと思ふ間もなく、華嚴の瀧の上流である湖尻の川にかゝつてゐる橋を渡ると、周圍七里の一大湖は眼前に開けたが、霧が來去するので何程の潤さがあるか、朦朧として、たゞ人の想像に任せるものとして見えたのも却つて興があつた。以前は橋を渡らずに二荒山神社の方へ湖畔を沿うて行つてそこらに點在する旅館に泊つたものであるが、われ等は歌ヶ濱の米屋といふに着いた。樓に上つて欄による湖を壓して立つてゐる筈の男體山もぼんやりとして、近き對岸の家々の燈火も霧のさつさ風に拂はれる時は點々透明く、霧のちほひかゝる時は忽ち薄れ忽ち見えなくなつた。

雲霧は山につききものであり、塵埃は都のつき物であるが、萬丈の塵は景氣が
い、代りに少し息苦しい、山の湖の霧はひやゝかてこそあれ、安らかに吾
人の睡眠を包んでくれた。夢を訪ふものは銀鈴を振るやうな河鹿の聲ばかり
であつた。

二

平和の夢からさめて十日の朝だなど意識した時には、昨夜は少し厚過ぎる
やうに思つた夜被も更に重くは覺えなかつた。湖に面した廣縁に置かれた

藤椅子によつて眺めること、昨日は水の面をはつて一望をたゞうやむやの中に
うめた霧が、今朝はあともなく晴れて、大湖を繞る遠い山々の胸や腰のあた
りに白雲が揺曳してゐるばかりで、男體山は右手の前面に湖岸から直ちに四
千尺の高さをもつて美しい傾斜で、翠色滴るばかりに聳え立つてゐる。山
が自然の作用によつて條をなして崩れて巖積のやうなものを造り出すのを、
ゾレといふ國もありナギといふ國もあるが、男體山は頂上まで満山樹木が
茂つてゐるので、そのいはゆるナギの少いのは、人をして山に對してなつか
しい和らかな感じをもたしむるゆゑんで、それがしかも清らに澄みきつた萬
頃の水の上にノツシリと臨んでゐるところは、水晶盤上に綠玉を堆ら
すとてもいひたい氣がする。二荒山神社及びその附近の人家が昨夜は霧のた

めに遠く想はれたがけさは近々と指點し得るだけ空氣が明るいので、眼を男體山から左方へ移すと、連山が肩をつらね手を接して争ひ立ち並び圍んでゐる中に、前白根、奥白根がさすかにそれさうなづかせるだけの雄姿を示してまだ残つてゐる谷の雪が銀白の光を見せてゐるのもうれしい景色であつた。

朝食を終つてから宿の主人や東日の通信員の案内を得て復び華嚴へと向つた。大平の瀧見台へ到る途中、瀧の流れの見當へと行く右手の道もない林間叢裏に處々鐵網を張つて人の通行をさせぬやう用心してあるのが見えた。無理に瀧の上へ出て生命を粗末にしようとする狂人共を制するための手配であるが、見るさへにがくしい。瀧見台に立つて見ると昨夜の幽味は少しもななくて、瀧は明かに見え無數の岩燕が瀧飛沫の煙の中を朝の日の光を負ひなが

ら翼も輕げに快く入亂れて上下左右してゐる。この台から瀧を望むのも悪くはないが、瀑布といふものゝ性質が、俯瞰もしくは對看するよりは、その下にゐて仰望する方が、その美を發揮する、さなくばやゝ離れた位置から遠くわが帽子の簷のあたりに見る方がおもしろい。李太白の廬山の瀑布を望む詩の句にも、「仰ぎ觀れば勢轉雄なり、壯なる哉造化の功」といつてゐるが、瀑布の畫を描けば大抵李太白は點景人物になつてゐるほど瀑布ずきの詩人で自分からも、「よつて諸ふ風に好む所に、永く願はくは人間を辭せん」といつてゐる位に、名山の中に飽くまでも浸りたがつた先生である。その李太白先生も仰觀の一語を道下してゐる。どうも瀑布そのものが、高處より落ちるところがその生命なのであるから、仰ぎ觀るのがよいに相違なく、さうして

からこそ、「初め驚く河漢の落つるを、半そぐ雲天の裏」なぞといふ詩句も
出来て来るのである。また達望するのよろしい。同じ人が「日は香爐（峰
の名）を照らして紫煙を生ず、遙に看る瀑布の長川を挂くるを」といつて
のは遠望の觀賞である。

華嚴は遠望する譯にはゆかぬが、瀑布の下へは幸にして下りられる。そ
こで瀧見台より少し下つて、休み茶屋のあるところから、谷底へと下りた。
丁度瀧見台の真下へ下りるのだから、みちは甚だ危急であるが、老人の自分
が靴をはいたまゝ下りられるのであるから、さして老人の冷水業といふほ
どでもない。勿論巖岨を截り削つて造つた道だから、歩を誤つては大變であ
るが、鐵の棒を巖へ立てたり、力になるやうに鐵線を架してあつたり、親切

に出来てゐるから危ないともない。次第々々に下りて行くと華嚴の瀑布は見
えなくなるが、やがてどうくといふ瀑布の音が聞えて右手に立派な瀧が見
える。それは白雲の瀧といふので、その瀧の末の流れを鶴の橋によつて渡
つて對岸へ路はつゞく、橋の上は丁度白雲の瀧を見るによい。これは屈折は
してゐるが高さ五十間であるから他の土地にあつたら本尊様になるだけの立
派な瀧だが、華嚴の近くにあるので、月前の星のやうに人に思はれるのは是
非がない。然し鶴の橋の上に立つてゐると、瀧が近いので瀧飛沫は冷やゝか
に領に下ちて衣袂皆しめり、山風颯然として至つて、瀧のどろき流れのた
ざりと共に人をして夏のいづこにあるかを忘れしむるところ、捨て難いもの
がある。橋の名もよい、瀧の名もよい。紅葉の頃には特にウツリがよからう

と思はれる雅境である。橋を渡つて巖路を一轉回すると、やがて華嚴の大觀
は前面に現れた。

大谷川の源頭の流れに對し、華嚴の大瀑布を右手の軒近く見て、小茶亭が
立つてゐる、それが即ち五郎兵衛茶屋であつて、今日のところではこの茶店
又はその附近ほど天下の名瀑布たるこの瀑布の絶景を賞するに適したところ
はない。大谷川となつて瀧の水が流れ出す東の一方を除いては、三方は翠峰
青嶂に包まれてゐるその中央の高處から雪とふき雷と轟いて、岩壁にもさは
らずに一直線に懸空的に落ちて來るのが華嚴の壯觀である。瀧の幅と高さの
比例も自然に甚だ審美的であり、瀧壺の大きさもこれにかなつてゐる。瀧の
背景になつてゐる岩壁も上半部が三段ばかりに横ひだになつて見えるが、そ

の最上部のものは恰も屋簷のやうに張出してゐて、その縁邊が、鋸齒状を
なしてゐるので、鋸岩といふさうであるが、もしそれ、近くついてみる時
は、屋簷のやうに張り出してゐるその出が、五間餘もあるといふのであるか
ら驚く。これ等の巖壁の罅隙は、無數に亂飛してゐる岩燕の巢であつて、全
く、燕でなくては到る能はざるところである。巖壁の中部より下は、幾條と
なく水がほごばしり出してゐて、各衛星的小瀑布をなしてゐる。その中で數
へるに足りるのが十二もあるので、十二の瀧といふ名を與へられてゐる。十
二の瀧の中の一つで、華嚴に近く向つて右手のものは、高さが百卅尺もある
といふから、たとへ衛星的のものですらも他處へ持出せば、壯觀だの偉觀だ
のといはれるに足りるのである。これを以て推して華嚴の雄大を知るべして

ある。まして此境が冬になつて、氷雪の時にあへば、岩壁四圍悉く水晶ごころほり、白壁と輝いて、たゞ一條長へに九天より銀河の落つるをみる。その美しさは夏季に勝ること遠いものであらうが、今は「千年流れて盡さず、六月地長へに寒し」といふ詩の句の通り、人をして萬斛の涼味に夏を忘れしめ、飛沫餘煙翠嵐を巻いて、松桂千枝萬枝潤ひ、龍姿雷聲白雲を起して、岩洞清風冷雨とざしてゐる快さをもつて吾人を待つてくれる。この華嚴の景を直寫しようとして石扇や山扇や散水や雨冠の字を澤山持ち出したら千言三千言の文をつゞるのも難事ではあるまいが、漢字制限の世の中に文選的の詞章を作つて活字の文選者を弱らせたこと野暮なことであるし、女學生や小學生も修學旅行でじつ、懇になつてゐる場所のことを、今更らしく良齋張りの

文などにするのも餘り小兒臭いから、夏向きはすべて抛下著に限ると、あつさり瀧の水に流してしまつて、煙草のしめる瀧壺の冷え、その煙草から李白の詩句ではないが紫煙を生じさせてゆつくり一ト休み。

五郎兵衛茶屋の主人、名は五郎作、六十餘りの好人物的風采を具した男で、茶屋の開始者五郎兵衛老人の子である。五郎兵衛老人は華嚴の瀧が立派な瀧であるに拘らず、適當な觀賞場所がなくて、ただ瀧見台から觀望するに過ぎぬことを他國の人々が飽かず思ふのを道理と感じた。そしてこれは瀧壺へ下りさせるに足る徑を開くに限ると考へた。本業は人を使つて山深く入つて曲物(日光名物であるに拘らず、今はこれをひさいてゐるとの少いのは遺憾だ)材料たる木をさるのであつたが、その事を思ひ立つてから、獨力で測量し、

獨力で開鑿しはじめた。人々はそんな無理な事が出来るものかと嗤笑した。非難や嗤笑は、世の中の賢顔する詰まらない男、ガスマタ野郎、十把一トからげ野郎の必ず所有してゐる玩具である。五郎兵衛老人は玩具におどされるやうな男ではなかつた。その鶴嘴を手にしだした時はすでに六十三歳であつたが、せかず忙ず、毎年々々コツコツと路を造つた。七年の歲月は過ぎた。明治三十三年に至つて路は成就した。それが即ち今の路である。三十三年以前は瀧壺へは下りられなかつたが、徑が出来てから世人は華嚴を十分に觀賞するを得るに至つたのである。耶馬溪も昇仙峽もこれを愛しこれを開く人があつてから世にあらはれるに至つたのである。華嚴も五郎兵衛老人を得てから愈々その美を發したのである。瀧の神も吾人も五郎兵衛老人に滿腔の謝意

を致さねばならぬ。

對岸の高處に明智平といふのがある。馬返しからそこを経て中禪寺へケーブルカー敷設の企てがある。それが成就すれば、八分乃至十二三分で、馬返しから中禪寺へ行くことが出来るやうになる筈であるとの事だ。五郎兵衛老人の工事は誠意と勇氣との自力で出来たのだが、この工事は資本と巧智との衆力で出来るのである。出来上つた上はいづれも感謝に値するが、ケーブルカーの工事が勝景の風致の上に十分の考慮を拂つて施行されんことを望む。叡山、筑波山の如きはなくもがなのものだといふ評さへ聞くが、こゝのはけだし出来れば出来た方が婦女老幼のために甚大の利をおくることにならう。

歸路についた。白雲の瀧、鵜の橋は矢張り好い感じを人に與へる。歸り

は上りになるのと、一度でも歩いた路なると、峻嶮の感じを大に薄くする。上りをはつて一ト休みしながら、下までの深さを考へると、箱根の大路から堂ヶ島へ下りる位、或はそれより一二町少しくらゐのものであつた。

中禪寺の區長に迎へられて、人々と共に宿へ歸ると、直に湖に浮んだモーターボートで湖を一周しようといふのである。四山環翠、一水澄碧の湖上に輕艇を走らせれば、涼風面をなぐつて、白波ふなばたに碎くるさま、もごより爽快の好い心持である。歌ヶ濱のフランス、イギリス、ドイツ大使別館いづれも景勝の地を占めて湖に臨んでゐる。立木觀音で艇を出て、立木をきざんだ本尊の古拙ではあるが面白い像を見、勝道上人の所持であつたといふ傳の刀子だの錫杖だのを見た。勝道上人は日光の開山者で、日

光を開くために前後十數年を費し、それまでは世に知られない神祕境であつたのを、遂に開いたのである。その事は空海の性靈集中の碑文に見え、またそれによつて書いたと見える元享釋書にも見えてゐる。神護景雲から延暦にわたつての事で、弘法大師よりは少し前の人である。この頃は有力の佛者が諸所の山々を開いた時代で、小角が芳野を開き、泰澄が白山を開いたのなどは先蹤をなしてゐる。上人の所持物だつたといふものが眞實であるならば相當に貴族的有力者の生活者だつたことが窺ひ知られる。おもふに地方において中々の權力地位を有してゐた人であつて、それでこの山をも開き得たのであらう。元來この山の名は二荒山であつて、音讀して美しい字面を填めて日光山となつたのは、たとへば赤倉温泉の中の嶽が名香の嶽の字を填められ、

名香を音讀して妙高山となり、今日では妙高山で通るやうになつたと同じである。まゝ二荒を普陀落にあて、觀音所縁の山名に通はせ、それで觀音をさざみ、勸請などもしたのであらう、弘法の文にもはやくそのしやれが見えてゐる。とにかく勝道上人のおかげで好い山が開けたものであるから、感謝の情を起さずにはゐられない。

堂を出て心づくのは、華嚴の瀧に飛び込んだ馬鹿者どものために供養塔が建てられたり、地藏尊がさざまれたりしてゐるところである。これは死者をかなしむ美しい人情のあらはれてあるが、死者は眞に人をわづらはし地を汚したものである。死にたくなるには何れそれだけのわけがあつてだらうから、一概に罵倒したくもないことではあるが、同胞の一人が飛込んだとすると、さ

あ大變だ、大騒ぎをしてその死骸を捜し出す、それぞれの公私手續きを取る、その面倒さは一通りのものでない。死んだ人はかの恐ろしい瀧の中へ飛び込んだなら、一切この世とは連絡が絶えてしまふ位に考へてもあらうが、どうしてそんなに容易に一切が水の泡となるものではない。瀧壺は卅何尺の深さがあつても、死骸を食つて消化するのでも何でもないから、必ずこれを吐き出す。大勢の土地の人々は必ずこれを見付出す。見るも物うい醜い屍は煩雜な手續きを経て後に適法に處理される、その厄介を人々に掛けるとは一と通りや二と通りでない。死者もその間は死恥をさらさぬ譯にはゆかぬし、死者の遺族などは重々困難の立場に立つ譯だ。自殺は人の勝手のやうなものだが、華嚴飛び込位知恵のない、後腐れの多い下らない死方はない。生を否定

してゐるに近い佛教ですら自殺は禁ぜられてゐて、釋迦存生當時厭世觀の極點に立つて、獵師であつたものに自分を殺させた者、その他の自殺をはかつた者等が釋迦の彈呵を被つたとは記録に明かである。西藏やインドの蒙昧信者が身を棄てる如きも誰か今日之を是認しよう、まして宗教的からでも何てもない、詰まらないところから自殺しようとして華嚴を選ぶ如きやからには、自殺の權利も何もあるものではない。特に華嚴をえらぶ如き下らぬわがまゝを許せる理由が何處にあらう、涅槃の瀧といふのが何處かにあつたら知らぬこと、華嚴は高華偉麗の世界である。白牡丹花に蟻のはひ上るのはまだしも許し得るとしても、華嚴にきたない馬鹿者の死體をさらさうといふ場席はないわけだ。華嚴行願には火の中へ飛び込んで清凉世界を得る談はあるが、それも淺

間山へ飛び込めといふやうな譯ではない。華嚴へ飛び込みたいやうな氣のする人があつたら、六十三歳から瀧壺道を七年かゝつて造つた人にもはぢて、せめて故郷へかへつて、半年なりと鋤でも鋤でも振り廻して働いて見て貰ひ「石塔に鉢巻」といふ壯んな諺が日本にはあるが、石塔になつた氣で鉢巻をして働いたなら、華嚴の瀧はその人の棺前の華ではなくて、必ず酒のさかなたる好い眺めてあらう。と先亡諸靈を悼むにつけて、つくづくと心中に思つた。

復び艇へ戻つて寺ヶ崎の端を廻り、上野島かけて大日崎の方を走ると、艇の位置が變るにつけて四圍の山々も動き、今までは見えなかつた山が姿をあらはしたり、今まで見えなかつた山が隠れて行つたり、青山翠巒應接にいとまがないその中に、足尾方面の山だけが、その鑛毒に蒸されて焦枯れた林木の見るも情ない骨立した姿を見せてゐる。あれだけに育つた木々だから、何とかしたらば繁茂をつづけられるのだらうが、二十世紀的、資本的、ドシク、バタ／＼的に無遠慮に採鑛精煉の事業をやられては、自然も破壊決裂させられるのを如何ともし難い。地獄變相の圖のやうな景色が出来ても是非におよばないが、何人にも詩人的情緒はあるから、生氣に充ちた青々とした山々の間に鬼々しくなつた枯木の山を望んでは暗然としてこれを悲しまないものはない。

段々走つて白岩あたりに行くと、岸のさま湖のさまも物さびて、巨巖危く水に臨み、老樹矮びて巖に倚るさまなど、世ばなれてうれしい、仰げば蓋を張つたやうな樹の翠、俯むけば碧玉を溶いたやうな水の碧、わが身も心も綠化するやうに思はれた。千手ヶ濱から赤岩、丁度白岩に對してゐるが、岩こそ赭色なれ、こゝも宜い景色である。千手ヶ濱で艇を出て、アングリング・エンド・カウンスリー・クラブの養魚場を見たが、艇から上つて平地の林中へ入つて行く感じは眞に平和な仙郷へでも入るやうで、甚だ人に怡悦の情を味ははしめた。綠蔭鮮かなるところ、小流れの清水を一區劃一區劃的に段々たへて川マス、ニジマス、ブルトラウト、スチールヘッド等の各種鱒族の幼魚を養つてある。水清く魚健やかに、日光樹梢を漏りてかすかに金を

篩ふところ、梭影縦横して魚疾くはしるさま、これを見て楽しんで時の經つのを忘れしむるものがある。菖蒲ヶ濱にも養魚場がある。これは帝室關係のもので、野趣は少い代り堂々たる設備で、養魚池もひろく、鱒も二尺位になつてゐるのが數多く見えた。釣魚もおもしろいが養魚はなほ更佳趣の多いこと、二ヶ所の養魚場を見て、自分も一閑地を得たら魚を養ひたいナアと、羨み思ふを免れなかつた。莊惠觀魚の談このかた、魚をみるのは長閑な好い情趣のものに定まつてゐるが、やがて割愛して、今度は艇を棄て、自動車で龍頭の瀧へと向つた。

龍頭の瀧もまた別趣を有してゐる好い瀧である。水は斜に巨巖の上を幾段にも錯落と離合してほとばしり下るので、白龍競ひ下るなどと、古風の形容

をして喜ぶ人もあるのだが、この瀧のよい處はたゞ瀧の末のところにあんざして手近に樂々と見るとき、巖石の磊砢たるをば眼前にするところにある。

路は男體山の西へ廻り込んで、さしたる傾斜もない野を知らず知らずにつて戰場ヶ原にかゝる。古は湖底が沮洳地でもあつたかと思はれるのが戰場ヶ原である。可なり潤い面積の平野に、いじややまあやめが澤山咲いてゐて、高原氣分を漂はせてる荒漠の景が人を襲ふが、こゝは雪がまだ山々にむら消むら残りの頃か、さなくば秋の夕べの物淋しい頃か、最も人にしみ入る情趣をもつところで、日光や中禪寺の人々が「喜びの花」といふよしのつ、いじ(この花が咲けばやがて多くの遊覽者が入込んで土地がにぎやかに潤ふ)が咲いてゐる、今はむしろ特有の持味を漲らせてゐないのを遺憾とする。

車はやがて湯元に着いた。湯の湖は左手にその幽邃味の溢る、ばかりなすがたを、沈黙のうちに見せてゐる。湯元は山奥の突き当たりのやうな感じのする地であり、古風の湯宿と今様の旅館とが入り交つてゐる湯の香の高い小さな村であるが、何となく人をゆつたりと落ちつかせてしまふやうなところが、實際山奥の湯村の氣分でもあらう。一浴して晝餐を取ると、村の人々が東京日日に對する好感を表示して訪うてくれた。その人々に擁されて、特に仕立て、くれた手漕舟二隻に分乗して、湯の湖を廻つた。湖は中禪寺湖より遙に小さいが、周囲の樹木の鬱々と茂つて、その枝も葉も今特に水に入らんとする重げに撓々に湖面に蔽ひかぶさつてゐるところや、藻の花が處々に簇れ咲いたり、杉木賊といふ杉菜の如く木賊の如き一種の水草が淺處にすく

すくとしてゐたりするさまは、まるで繪の如く小ぢんまりしてゐて、仙人の庭の池ではないかと思はれるやうな氣がする。南岸にはしやくなげが簇生してゐて、今は花はすがれてゐるが、花時の美しさは想ひやられる。兎島といふ半島の突出の北部の灣形に入込んだところなどは、どう見ても茶人的の大庭の池の甚ださび古びたやうな感じて、幽雅愛すべきである。この景色を取入れて別荘を設けた人のないのが不思議な位である。

三十七八年前になる。自分は湯元から金精峠を越えて沼田の方へ出たところがあるが、今はその頃より甚だ開けて、西澤金山などがその後開けたために、又群馬の方の菅沼等も遊覽地になつたために、道路は北へも西へも通じてゐて、實際は突き當りの地ではなくなつたのである。しかし自動車で行ける路

でもないので、昔日の健脚、今の寢足、しかたないからまた中禪寺へ歸つた。湯瀧は湯の湖より落つる水である。たきといふ語の通りに、眞白になつて岩の傾斜面をたぎり落つるのである。こどものすべり台を水が落ちると思へば間違ひはない。今に遊戯的にこの瀧を落下する設備をする人があるかも知れない、といふのはおどけばなしだが、ほんとにさういふことをしたら可なり突飛などの好きな人を満足させ得るだらう。車は夕暮にせまつて菖蒲ヶ濱から歌ヶ濱へと走つたが、この間のドライブは實に愉快である。右は中禪寺湖水なり、左は男體山なり、道は好し、樹木の茂れる中を走るのであるから、そのさやかさは幾度も繰返して味はひたいと思ふ位である。車中からふと見る湖岸にさゝ波が立つて赤腹といふ小魚が群騒いでゐる。産卵のために雌魚雄魚

が夢中になつてゐるのである。古い語で「クキル」とこれをいふ。北海道では今、群來の二字をあてるが、古は漏の字をあてゝゐる。にしんのくさる時は漕いでゐる舟の櫂でも艦でも皆かすの子を以てかすの子鍍金をされてしまふ位である。今雜魚はその生殖期の特徴たる赤い線を身側に鮮かにして、騒ぎまはつてゐる。と見るや否や土地の人は忽ち車を止めさせた。人々は渚に歩み寄つて、各手取りにせんとした、安成子も早速に水の中へ手を突つ込んで首尾よく手づかみにしたのは、時に取つての無邪氣な餘興であつた。宿へ歸つて鹽焼にさせて、先生大得意で天賜の佳肴に一さんのビールを仰いだところは如何にも楽しさうであつた。但しその魚の大き三尺五寸也、十倍にして。

十一日人力車をやとひて馬返しまで下る。途中、かごの岩、屏風岩など、いづれも他所にあつては名を高くするに足りるものであると賞した。馬返しより自動車を頼んで日光へ下り、東照宮大猷廟その他は今回は遙拜のみして、稻荷川を渡つて霧降の瀧へ向つた。瀧見台の茶屋まで車で行けるやうになつてゐるので勞はない。そこから細徑を少し行くと、俄然として路は巖端にまつて、脚下は絶壁の深澗になり、眼前の向ひの巖壁に霧降の麗しい相は見ええた。華嚴は男性美、霧降は女性美、一は直條的、一は曲折的、一は太い線、一は細い線、巖の様子もまた二者の間に相應した差があつた。霧降の瀧の美しさは、瀑布の形容によく素練などといふ字を使ふが、素練などといつたのは端的にその實を寫し得ない。しなやかに細い多くの線をなして、麗しく輝

かしく落下る美しさは、恰も細く裂いた紙を風に晒して聚散させたを見るやうな感じである。雄偉は華嚴にどどめをさす、妍麗は霧降を首位とする。わざわざ観賞するだけの價値は十分にある。

日光の美の中で、他にまだ見過ごし難いものがある。それは街道の杉並木である。平泉澄氏の撰の東照宮志にこの並木とは詳しく出てゐる。並木といへば何でもないものゝやうであるが、實にこれも又人のしたことの美しい一つである。で、今市までその並木の下を走らせて、わが國人の心の姿であり、神の愛したまふ相である正直その物の杉の樹蔭に翠影甚だ濃く、涼氣おのづから湧くすがくしさを十分に味はつた。神路山の山路、日光の例幣使街道、春日の參道、芳野の杉山、碓が關の杉山、いづれも好い心持のところ

であるが、特に此處は好い。たゞ行末齒の脱けたやうにならぬことを望むのみである。

今市より北折して會津へ至る道も、神々しさは餘程欠けるが、同じく杉並木が暫くは續く。田舎びて好い路で、菅笠冠つた人でも通りさうな氣がする。大谷川がもう恐ろしく發達して大きな川原になつてゐるのを越して、車はひた走りに大桑といふを過ぎると、やがて稀有なる好景に出會した。それは石壁の岸高さが下に碧潭深く湛へてゐる一大河にかゝつてゐる橋が、しかも直に對岸にかゝつてゐるのではなく、河中の一大巨巖が中流に蟠峙して河を二分してゐるその巨巖にかゝつてゐるので、橋は一旦巖上に中絶した如くなつて、後にまた新に對岸に架されてゐるのである。丁度東京の相生橋と同じやう

な狀であるが、その中島が素ばらしい大きな一つ巖であるのが目ざましくも稀らしい景色をなしてゐる。自分は初めてこの路を通つたのであるが、こゝに差掛かると同時に、これが鬼怒川の中岩であるなと心づいて車を止めさせた。舊い頃では橋南谿と共に可なり足跡が廣く、且又同じく紀行（漫遊文草）を遺した澤元愷が、この中岩を稱して、その上で酒など飲んでゐることがその文によつて記憶に存してゐたからである。車を下りて靜かに四方を見ると、鬼怒川が北から來つてこの巖にせかれて分れて深潭をなし縈廻して悠揚逼らず南に晴れやかに去る風情はまことに面白く、兩岸の岩壁、砂汀のさまも好く、松や雜樹の畫意に簇立つてゐるのもうれしい。安成子は河原に下立つて寫眞を撮つた。

中岩より以北の道路は水をはなれるので景色は平凡になる。中岩の奇は平凡の中に突として奇をほし、いまゝにしてゐるので愈々妙なのである。然し鬼怒川の兩岸は中岩以北も相當に太古よりの秋霖春漲に洗ひ出されて巖壁をあらはしてゐるとだらう。随つて細かに川筋を見たら美しいところもあるだらうと思はれる。

車は高德、大原を経て、遙に左方對岸に鬼怒川發電の設備を見、それから鬼怒川に架かつてゐるよぼく橋を渡りかゝつた。橋上の眺めは左右に巖壁を見、白沫立つてたぎり流るゝ川に臨むのであるから、綠蔭水聲おのづからに兩袖に清風をわかす概があつて、名も餘り高くはないところだが、小ぢんまりした溪谷美のあることを感じさせられる。橋を渡ると下瀧温泉の旅舎が

あつて、溪に臨んで樓を起してゐる。われ等はこゝの草分の麻屋といふに投じて晝餐を取つた。樓上の一室の欄によると、溪は目の下に白くなり碧くなつて流れてゐる。水聲は中々激しくて、川といはうよりは瀧といつた方が好い位であり、成程「瀧」といふ地名も名詮自性であると首肯させた。下瀧より少し上に河一體が大瀧になつてゐるのが眞白に見えて、そこより上は上瀧と小名に呼ぶところだ。川上は高原、鷄頂の諸山が聳えて、海拔は左ほどに高いところではないが、山懐のすばいところを鬼怒川が怒流してゐるので、氣流の加減によつてか、他處では雨がなかつたのに、聞けば毎日雨があつたといふとで、この日も驟雨的の雨が颯然と降りそゝいだ、山間の私雨といふ言葉は實にかういふのをいふのであらう。

我等は此地の探勝を他日の楽しみにして復び車上の人となつた。これより船生、玉生、田所の地を矢板へ走らせて、それから那須野が原の一部分を突破し、關谷から山へ入つて鹽原へ行かうといふのである。

車を出すと、やがて驟雨はい然として至つた。爽快を呼んで走ると、船生に至る頃に止んだ。船生は、知人の經營した銅山の所在地で、地名だけは自分も親みを有つてゐたが、山岳地ではない、むしろ平野の地であつた。玉生もその他も山といふほどのものはない。矢板へは僅の間に着いた。矢板から那須野へかゝる頃に、雨はまた來つた。那須野が原へかゝつて雨煙が野を籠めて路に塵もなく、一路坦々、砥の如く、平らかに矢の如く直くして、目路遙に人影を見ざる中を、可なりの速力で駛らせると、恰も活動寫眞を見る

が如くに、遠くの小さな物が忽ち中位になり、大きくなつて、そして飛ぶやうに背後へ投げやるが如くに過ぎ失せてしまふのも一種の快味がある。これからの人々は自動車ぐらゐは自分で操縦して、遊覽旅行の一程にドライブの一項を挿入するやうにならうと想つた。關谷からは鹽原山である。入勝橋あたりからの道路は實に楽しい美しいところだ。路幅はあり、屈折は婉曲であり、樹蔭は深いし、左手の帯川の溪は眼に快いし、右手の山は高し、時々小瀑布を景物に視すし、山嵐溪風いづれにしても人の膚に清新その物の氣味を感じしめる。必ずしも取出で、一々何の景、彼の勝といふを須ゐない、全體が一致して人に清涼感を起させるのである。花氣人を襲ふ、必ずしもその薔薇たり芍薬たるを問はずして名園の春に酔ふやうに、何がもたらすといふ

ともなしに鹽原の溪は人を好い氣持にする。松、五葉松、檜、桂の類から、
 アクダラの樹や椴の樹のやうな樹でも、それが損傷はれずに老いて巨大にな
 れば、それ／＼の美しさをもて人に酬いる。日光でも鹽原でも箱根でも、今
 は景勝地の人民は楽しんで樹木を大切にす。それは眞にその土地を愛し、且
 土地を品位づけるゆゑである。山高きがゆゑに貴からず、樹あるを以て貴
 しとするといふ古い語は今でも生きてゐる。樹が多ければ山が潤ふ、水が清
 くなる、空氣が好くなる、景色が乾枯と怪詭といふイヤな味を出さなくなる、
 人をして親みとなつかしみとを覺えさせる。縣廳の世話の届くからでもあら
 うが、土地の人民の聰明と善良とが、何程その土地をよくするか知れぬ。二
 十何年ぶりがて鹽原へ来て、前の鹽原より今の鹽原が便利で、そして平安で

あるのみならず、至るところ清潔になつて、しかも幸に俗趣味に墮せぬ公
 園的の美に仙郷的の幽を兼ねた土地と發達したのを見て、愉悅の情に堪へぬ
 氣がした。魚どめ、左鞞、寒凄橋、一々列擧していふまでもない、皆好い好
 いとほめちぎつて、福渡戸の榭屋に投宿した。日はまだ高かつたが雨ははら
 く／＼と降つてゐた。

翌十二日は天狗岩、野立岩、七ツ岩を賞し、門前、古町、木の葉石、畑下、
 須卷、小太郎ヶ淵、玉簾の瀧、鹽の湯等を見めぐつて晝過ぎに西那須發車、
 夕暮上野着、この三泊の旅を終つた。鹽原にも瀧は多く、仁三郎の瀧、萬五
 郎の瀧、龍化の瀧等、観るべきもあるのであるが、わざと観ないで済ませた
 のは、いくら夏の日の瀧見でも、重複は暑苦しいからと、華嚴に敬意を表し

て、今度の秋の紅葉の頃の楽しみに残したのであつた。(完)

上高地

吉田玄二郎

七月十八日午前四時水鶏のたゞく音に旅の夢を破らる。霧が重く落葉松のこみちをこめてゐる。ほ、い、い、ぎすの啼く山道を下りて沓掛に出る。夜が明けたばかりの千曲川原を埋めて月見草が咲いてゐる。篠の井から姥捨にかゝる

ころは雲も晴れ善光寺平に入る千曲川を霧の下に見る。四つ五つばかりの村童が赤く熟れた杏子をかゝへたまゝ畑の隅に立つて汽車を眺めてゐる。姥捨は田を植ゑて幾日もなき眺めてある。

孤鳥霧をかすめて川をわたるを見る。

ほごゝぎす鳴け姥捨は田植ころ

幾つかのトンネルをくゞつて明科に出れば、視野一轉して犀川をへだて、松本平に移る。山にはまだ刈りのこされた麥がある、草芙蓉があかく夜明けの山ざには咲いてゐる。犀川の白い礫をへだて、雨にぬれた連山がくろく巨岩のごとくそゝり立つてゐる。山のひだくに雪溪のかゞやくを見、山を戀ふ旅人の心はをどる。雲は山腰をかすめては散る。

松本に着いたのは午前十一時半島々までは電車があるが、上高地に登るには出発の時間が遅すぎるので、松本支局の武田氏に送られ、大町から見えたと大毎の石川氏と道伴れになり強力二人、同勢四人にて島々まで自動車を走らせる。

日本アルプス上高地は久しい間のわたくしのあこがれの地であつた。町を出て間もなく松並木に沿ひ、梓川を右に見、飛驒高山への街道の古驛舊宿を過ぐれば山はいよく迫り、川はいよく白き瀬をなして流れる。

梓川の長い橋をわたり、水柳のやはらかな影をながめつゝ島々に着く。午後二時道は島々南澤の流れによりどころなく霧のやうな飛沫を浴びて歩一歩一歩に歩く。上高地まで山徑六里、前程を思つて先づ靴の紐を結ぶ。

山は迫つて溪は深く、岩を切り、崖を削つてわづかに一筋のこみちを通ずるのみである。

山は雲に懸かり、溪は蔭暗くして奔湍雪の如し。斷崖諸所にかゝりて行人の足をとゞむ。かつら、さち、さわくぬぎ、みやまななかまど、いなのみ、いらかばなどが殊に多く、かつらは二抱へ三抱へのものも珍しくはない。岩魚留のかつらは周圍二丈三尺。丸味を帯び、雨にぬれたかつらの葉のやはらかなるはとりわけて捨てがたいものである。

折から雲低く垂れて懸崖に雨を呼び、たま／＼閑寂なる鳥の音をきく。霧は嶺に迷ひ、煙雨糸のごとく、幾重疊の峰をつゝむ。時雨ならば猿も啼くべし。

かしの葉を幾倍したる形にて大きな五葉よりなれる野草がそこいらを埋めてゐる。いかにも怪奇的な葉である。厚く、どす黒く、觸らば棘を感ずるであらう。案内の男に訊ねればゴハ(五葉?)といふ。

或時は道に岩魚釣る男の下り來るに會ふ。或時はリュックサックを背負ひ、天幕をかつぎ、ピッケルを握み、岩のやうな靴をはき、日焦けた顔の頼母しい青年たちの黙々として山を下るに逢ふ。ゆきかふ人は或ひは黙禮し、或ひは短い挨拶を交はして通り過ぎる。山を歩む人々のなつかしい美しい習慣である。

小粒の雨はやがて驟雨となり谿をへだてたばかりの懸崖をも見失ふ。風さへ加はつて谿川のすさまじい瀨の音と、木をうつ嵐の聲に一鳥啼かず。

溪のいたるところ山氣凝つて涼々の聲を聞く。極樂水、涼澤等に佇んでは眞清水をくむ、極樂水の名に恥ない。山中の醍醐味いひつくしがたし。

飛瀑は霧と化して河心の巨巖をつゝんでゐる。巖頭にしやくなげの霧を浴びて白日夢のごとく咲いてゐるのを見る。

天正十三年の秋飛驒高山松倉の城主三木休安の弟秀綱豊臣秀吉の臣金森長金に攻められ城を捨て、逃ぐ。途にして妻子を失ふ。妻女その子とともに島々南澤に迷ひ柚人らに捕へられて木に縛せられて殺さる。流れに臨んでその跡がある。山を搏つ嵐の中に立ちどまつて不運なる人々の魂を弔ふ。さらには梨の實を川に投じて吉凶を卜したといふ淵をのぞいてはあはれに思ふ。日本アルプスのなかにはいつて迄かやうな痛ましい残忍な人間生活の一面を

見ようとは想像もしないことであつた。柚人たちの小屋を通り過ぎて岩魚留の茶屋にいこふところからふたゝび雨ははげしく、日は暮れかゝつて来た。つたう、いしの花の雪のごとく、またたびの葉のやゝ紅らみたるが美しく山をかざつてゐる。薄暮の山徑はしばゝ雨に途絶えてしまふ。徳本峠まではなほ一里。風はますます荒れる。

徳本峠は海拔七千尺、上高地よりする登山者にとつて日本アルプス第一の關門である。日さへあらば天氣さへよくば上高地の溪谷をへだて、直に穂高の靈峰と面接すべく、恐らく穂高展望の隨一なるものであらうに、日は暮れ、嵐は木をうつ。

峠の茶屋の戸を排して中に入ればすでに五六人の學生たちは毛布をかむつ

て寝につかうとしてゐる。雨を防ぐためにかむつて来た油紙は破れ、肌は雨に打たれて寒さにわななく。シャツを取かへ、冬の外套を着て、少憩の後山を下る。

日は暮れたがまだ道はほの白く見える。雪溪は杳然として道に沿ひ夕暗のなかに流れてゐる。

山を下るにつれて木立深く、道はやがて爪先をも弁じがたくなる。雨のなかに提灯を點じて道を拾ふ。雨具の下に辛うじて燭をいたはりつゝ守る。幾度か燭を消しては嵐のなかに立ち迷ふ。道に沿うた雪溪のみが暗のなかにたどたどしく浮ぶ。下つて行く溪の方の霧の中からはかに二三點の燭が見出された。旅館「五千尺」からの迎への火ではないかなど、語りながら火を目

あてに下つてゆく。五六人の若い人たちが立ちどまつてゐて「大きな牛が數頭この下の道の真ん中に寝てゐてとても下りてゆけぬから、峠まで引かへさうと思つてゐる」といふ。

わたくしたちは山を下つて行つた。いかにも立派な乳牛が一頭の子牛をつれて嵐のなかに悠々と道の真ん中に寝をべつてゐる。子牛の頭を撫で、やれば子牛は雨に打たれた眼をしばたゝきながら旅人を仰ぎ見る。

間もなく道は平坦になつた。廣いつわの葉と熊笹につまれたぬかるみの道を急ぐほどに道は沼と化してしばく脛を没する。野兎が道を横切つて提灯の燭をかすめる。天も地もたゞ晦冥。山も見えず空も見えない。恐らくわたくしたちは五六千尺の深い霧の海の底をあるいてゐるのであらう。振かへ

れば後からついて来てゐたかの五六人の登山者たちはいつの間にか遠ざかつてしまつて、はるか霧のなかにたゞ一度夢のごとく描き出された火影を見出したのみで、つひに火影を失ひ、聲を失つてしまつた。

わたくしたちは急ぎに急いだ。幾度か燭をかざしては丸木橋をわたつた。

濁流は丸木橋を沈めてゐた。その間にも山の男たちは山案内の喜作翁がその子とともに雪崩に打たれて死んだこと、乗鞍の牧場に熊が出て番人を食ひ殺したことなど、いかにも山の物語らしい話をつゞける。

燭が消える。嵐は溪に狂ふ。たゞ嵐の聲のみである。げきとして聲なきにもまさる山のわびしさは嵐の夜の、嵐の吐息する間の山の沈黙であらう。木によりては冷たき雨を避けつゝ嵐の底の死靜に耳を傾ける。

靴には水が溢れ、背には冷たい雨が流れ込む。着かへたばかりのシャツもぐつしよりになる。まゝよ道あるも、道なきもかまふことかは。快よく雨に打たれつゝ草を分け木の下をくゞる。

霧のなかに二ツ三ツ四ツとまぼろしのやうな燭がまたゝき初める。若い人たちのキャンプである。小梨平の柔かな草の上には若い人たちの美しい夢を守る幾十のテントが寂然として嵐のなかに横たはつてゐる。

上高地の嵐の夜は若い人々の靜かなるテントを洩れて来る燭によつていかに尊くせられ、懐かしくせられてゐるか知れない。若い人達よ。君等こそ人生の最も尊い幻に生きてゐるのだ。君等こそ天上へのあこがれを如實に生きてゐるのだ。たゞ一本のろうそく、一個の飯盒、一枚の毛布、一挺の手斧。

君等はまさにワルデンの池のほとりの哲人の生活を生きてゐるのだ。小梨平のやはらかな草のなかに君等のテントを洩れて来る一本のろうそくの火を見る時上高地の夜がいかに尊くきよくせらるゝことであらう。君等の草の中のキャンプの火は、かの中世紀のモナステリーの窓を洩れて来る聖火の如く静かである。君等の草の中の夢を思ふ時わたくしの胸はうづく。

夜十時上高地の旅宿「五千尺」に着く。

雨のためにテントを逃げて来た人たちが集まつて来たので宿は俄に混雑である。

旅館「五千尺」は六百山の懸崖を背にし、梓川をへだて、直に穂高に對してゐる。裏の小暗い湯槽に浸り静かに恐ろしい嵐を聴く。燭は暗く、鏡の水は

氷のごとく冷たい。いかにも山寺のやうな建物の感じてある。部屋々々のランプの燭の薄暗きも山の宿らしいなつかしき感じをわかせる。

館主丸山氏の好意で二階の西南端の一室に先づ疲れたる體を横たへる。

食膳に供へられた尺にも余る岩魚の鹽焼きのうれしさにわたくしは珍しくも酒盃を重ねて快よく酔つた。

窓の下は直ぐに梓川の激流になつてゐて、渚の水柳が夜の影をこめて窓を打たんばかりに繁つてゐた。

隣室には七八人の若い人たちが雨の晴れるのを待つて眠つてゐる。ひどく疲れてゐるらしく折々部屋の境の板戸を蹴つては夢を破る。

幾度か眼をさましては頭をもたげてガラス窓越しに空を見た。星一つなか

つた。たゞすさまじい嵐の聲と、瀬の音のみ夜つびて狂ひに狂ふ。

二

まだ夜が明けきらぬうちに隣室の若い人たちは雨を衝いて宿を出て行つた。夜明け方になつて雨は小降りになつたが、梓川の流れはひたすらに水聲を増しに増した。

わたくしは起きて窓を排して直下の流れをながめた。梓川はやゝ濁つて渦をなして流れてゐた。水柳の下葉は重く水に垂れてゐた。小雨が横なぐりに

降つてゐた。河童橋の上には二三の若い人達が空模様を案じてはたゞずんでゐた。

わたくしは、不圖その刹那に窓と直面してそゝり立つてゐる黒い岩山の一角を見出した。雲は低く垂れてわづかに梓川彼岸の水柳といらかばの森林地帯のみを残してゐた。

十分廿分わたくしは暗い心を抱いて、密雲の奥に隠された穂高の雄姿を想像しつゝ、低く垂れた水柳の枝の下をくゞつてゆく梓川の流れを見つめてゐた。

岩燕が半天をかすめて南から北へ矢の如く飛んだ。

魂飛ぶといふのは恐らくその刹那のわたくしの心境を説明したものであ

らう。

わたくしは懼然として偉大なる穂高の靈峰に直面してゐる自分自身を見出した。

明神岳から前穂高の正面がその鐵のごとき千仞の懸崖を嵐の相うつにまかせ、雲の相摩するにまかせ、突兀として天に接してゐるのであつた。文字通りに一萬幾百尺の穂高は轟々として北の半天を劃つて直ちに天に觸れてゐるのであつた。そしてわづかに梓川の碧珠のごとき流れをへだて、窓に迫つて來た。

雨は沛然として岩をうち、雲は遽然として岩壁に碎けた。

嶺をつゝむ雲の奥からは縹渺として幾百條の銀糸のやうな瀧が斷崖を傳は

り、直ちに天に懸かつて落ちてゐる。まさに銀河三千丈、千曲萬折して天に懸かる姿である。雪は徐に徂徠しては銀河を香煙の懷につゝむ。

雲はその巔をあらはにすることを惜しむかのやうに、纏綿として一聯の尾根のほとりを低迷してゐる、時としてわたくしたちは雲のなかにちようど紗をへだて、物を見るやうに淡墨で描かれた尾根の一線が高い天空を横ざまにつらぬいて走つてゐるのを見た。

わたくしは雨に濡れた穂高を見たことを心からよろこんだ。嶺も岩も雨に濡れて鐵のごとき黒い。そこに雲のなかに鑄りつけられた幾百條の飛瀑がその黒い岩壁を縫うて天空から飛び散るのであつた。

雲が晴れ、雨がやむにつれて穂高の大雪溪は黒い岩山と岩山の間で大傾斜

をなして天界から悠然として流れて来た。最初は瀧のごとく見えた。雲が黒い溪を静にはひながら尾根の方へ上るにつれて雪溪は横にも縦にもひろげられて行つた。

雪溪をとりまく幾つもの岩山と岩山との間にはは、は、まつの森林地帯が、たこへば青い島々のやうにとりのこされてゐて、それらの島と島との間には、やはらかな、しかも雪溪にもおとらぬほどな廣い草原が離々としてかゞやいてゐる。白い雪に對してその草の青さは貴い瓊玉を聯想させる。半日その草の上に仰臥して白日夢を楽しむことを得ばまことに人生の至福であらう。雲は靜かに草原をかすめ、雪溪に消え、やがて絶壁に湧きて天に攀づ。

空が晴れた！と若い人々が狂喜して叫んだ。雲のすきまから日の光りがミ

ルクのやうなしらかばの幹を照らしてゐた。積のほごりにはまだ小雨が低徊してゐた。

その刹那であつた、わたくしはかつて見たことのない美しい自然を見た。

優婉といふにはあまりに大きく尊かつた。莊嚴といふにはあまりに聖麗であつた。眞に恍惚の境であつた。

雨にぬれた穂高、明神の全幅を通して七月の太陽は一草一石一木の上にも白銀をちりばめてしまつた。岩は白銀にかゞやき、瀧も、雲も、斷崖もここくく光つた。岩を落ちる一涓一滴ここくく光りに光つた。

たちまちにして雲は山を包んだ。岩をつゝんだ。たゞ幾百條の銀龍のみが日の光りを浴びて黝い岩に縁り雲の間に或ひは閃々として、或ひは縹渺とし

てわたくしたちの頭上一萬尺の高さを翔るのであつた。

わたくしは雨の上高地を訪れたことをありがたく思つた。

午後はまた雨であつた。

雲は風のごとく梓川の磧にわき、水柳をつゝみ、しらかばの林にまつはり、

雨は秋のごとく静かであつた。

山は聳え、山はかくれた。

白樺のほだ火をかこみて山の話をさくによきつめたき雨の午後であつた。

「もし人間がゐなかつたら自然は如何に空漠たるものであらう！」わたくしは一山の案内人たるにすぎなかつた上條嘉門次爺を思ひ出すにつけても、ブレークの詩の言葉を今さらのごとく感ぜざるをえなかつた。聖麗なる上高地

の自然は一嘉門次爺の物語りによりてさらに幾倍の尊さとなつかしさを感ぜさせる。

十五歳のころか、しき（炊ぐの意。柚などに伴うて山に入り炊事の勞を執る小童）として山にはいつた日から七十一歳の秋死ぬ日まで五十六七年の間、かれは殆ど黙々として山のなかに一生を送つたのであつた。夏は梓川のほとりに岩魚をつる、冬は山に狩する、その間には山のごとき沈黙を守つて山の案内をする。そして一年のうち島々の家にかへるといふことは數日に過ぎなかつたといふことである。かれの一生についてはすでに親しくかれを知れる色々なアルピニスト達の手によつて色々な傳へられてゐるからこゝに贅する必要はない。たゞかれがいかに完全な、いかに立派な山の案内者であつたか

について、眞骨頂を語るべき一逸話だけを記して置くことにする。大正五年であつたか、有名な登山家某氏が初めて穂高縦走を企てた時、かれは七十歳の老軀を提げて案内を引きうけた。恐らくかれはその企てをもつて最後の案内と覺悟してゐたことであらう。今まで長い間多くの山岳家たちによつて果されなかつた穂高縦走は見事に成し遂げられた。その榮ある成功の刹那においてあつた、かれはその巔きに達せんとしたる刹那、先登者の最後の一步を控へて雪の上に立ちどまつた。そして登山家某氏に穂高縦走第一番目の名譽を永久に譲つた。

雪と雲と岩山の尾根とに育て上げられたかれの魂はまことに聖麗なる山そのもの、黙々たる權化であつた。

たゞ一人の山案内人嘉門次翁が、かつてそこに住み、かつてそこに黙々として山を眺めつゝあつたといふことだけでも上高地の自然はどれだけ印象深く、尊くせられてゐるか知れない。

「翁さんはいつものにこゝ／＼笑つてゐましたが、怒る時はこはい顔をしました。翁さんが怒るのは犬の行儀がわるい時でした。翁さんの犬は幾匹ゐても行儀よく順々に御飯をたべましたよ」嘉門次翁についての丸山氏の物語りはそれからそれへとつきるところを知らなかつた。

丸山氏は上高地のために家産を盡くしたほどの熱心家である。山を語り翁さんを語る氏はいかにも仙骨を帯びたる人である。

ふたゝび雲がござれて日が水柳の葉を照しつけた。西の窓からは梓川のほ

ごりの水柳の葉越しに焼岳の赭い肌と、白く立ちのぼる煙とがすぐ近くの空に見えた。

明神岳の懸崖の中段から梓川の磧を横切つて美しい虹がかゝつてゐた。

わたくしたちは河童橋をわたつて大正池の方へ歩いて行つた。梓川の水はすてにいつものやうに青く澄んでゐた。岩魚をつる男たちが水柳の下にしやがんでゐた。

梓川に沿うて十町ばかりも下つたところに温泉宿清水屋がある。山から下つて来たばかりの若い人たちが縁端に腰をおろして肩の荷をおろしたりしてゐた。そこからは六百山や、霞澤岳等の南畫式な岩山が梓川を控へて繪のやうに美しく眺められる。

すぐその隣の古びた家では、冬になれば熊を狩るであらう山の獵夫たちが五、六人しきりに額をあつめて棋盤を見つめてゐた。

いら、かばの林のなかをくゞつて、焼岳の爆發の名ごりもまだ生々しい熔岩や枯木の間を飛びながら池のほとりに出た。

十三年前の焼岳の噴火の際、吐き出された熔岩が梓川の流れをふさぎ、山を焼き、つくり出したのが大正池である。白骨のやうなしら、かばの幹ばかりが焼け残つて池の中に林立してゐる。穂高の雪溪が池の底深く沈んでゐる。岸ではほ、こ、ご、ごすがなき、老鶯がさへづつてゐる。「オフィリヤが眠つてゐさうだ！」水柳の下の静かな影を顧みて石川氏はかくいふた。たしかにそこにはこまやかな水柳の影にいだかれてオフィリヤの悲しき歌をきくにふさはしき

水のしづまがたへられてゐる。雲はオフィリヤの影を見失うてなほ水の上をためらふ。

顧みれば頭上三千尺ばかりにして焼岳が燃えてゐる。山の肌は赭く荒れてゐる。燃えのこされた山の木がそのまゝに黒く焦げて針の山のやうな形をしてゐる。すさまじき程に引きさかれた山のひびが、當時の恐ろしい光景を想像させる。

山を砕くダイナモの爆音が川下の方からつゞけさまにこだまして聞えた。草を分け、行潦を飛んで梓川をわたり七八町ばかりも歩いたところに殊に美しいしらかばの森林があり川の瀬音を聞きつゝ森をさ迷ふ。草むら越しに見る梓川の面にはすでに夕霧がこめてゐた。幾度か行潦をわたり、白樺やあら

らぎの小暗い葉蔭を過ぐれば、そこら一面に向日葵に似た黄色な花が見渡す限り如何にも美しく下草を埋めて咲いてゐる。案内の男にたづねればかんじや草といふ。このあたりにははちうどなどといふグロテスクな花も見かける。木立がやゝ開けて青い空の影を仰ぐと見る間に、六百山や霞澤岳の裾にからんで田代池がつめたくひろがつてゐる。水は浅い。しかし如何にも清れつてゐる。その白く静かなる池の面を見ればむしろ死の國とも名づくべきであらうか。どこまでが池であるか、或は草原であるか、沮洳地であるか、しらかばの森であるか、劃然たる境はきはめがたい。夕霧のこむるところ模糊として或は森となり、或は水となり、草となる。空山一鳥啼かず、頽唐の氣冷たく漂ふのみである。ちつと耳をすませば瀧の音が聞えるが、木立が深いために瀧

を^み見ることはできない。

十^{いじやう}以上の小島^{こじま}が浮島^{うきしま}といつた形^{かたち}で點々^{てんく}としておのがじし一つ一つの死静^{しせい}の姿^{すがた}を守^{まも}つて池^{いけ}の面^{おも}に浮^うかんてゐる。恐^{おそ}らくかつて一連^{れん}の森林地帯^{しんりんちたい}であつたものが、水^{みづ}のために浸蝕^{しんしょく}せられて、その一部分^{ぶぶん}だけがわづかに浮島^{うきしま}のやうな形^{かたち}になつてとり殘^{のこ}されたものであらう。その一つ一つの小島^{こじま}にはしやくなげが咲^さき或^{ある}ひはしらかばの美^{うつく}しい幹^{みき}がをりからの落日^{らくじつ}にやはらかな影^{かげ}を静^{しづ}かな水^{みづ}の面^{おも}に投^なげてゐるものもある。池^{いけ}の面^{おも}には白^{しろ}い藻^もの花^{はな}が咲^さいてゐた。わたくしたちはそこにもやはれてあつた小舟^{こぶね}に乗^のつて小島^{こじま}の間^{あひだ}をめぐつた。北^{きた}すれば穂高^{ほたか}の雪溪^{せつけい}が池^{いけ}の底^{そこ}深く沈^{しづ}んでゐる。さらに東^{ひがし}すれば六百山^{ろくひゃくさん}や霞澤岳^{かすみさはだけ}が水^{みづ}の底^{そこ}にゆれ、西^{にし}すれば燒岳^{やけがだけ}の白^{しろ}い噴煙^{ふんえん}が池心^{いけしん}に燃^もゆる。

冷^{つめ}たい水^{みづ}、荒^あれたる草^{くさ}、田代池^{たしろいけ}は蕭條^{せうてう}として秋^{あき}のごとく寂^{さび}しい。
日^ひは暮^くれてしまつた。わたくしたちは深^{ふか}い霧^{きり}のなかを「五千尺^{ごせんじやく}」の方^{ほう}へかへつて行^いつた。

三

夜^よはふけてゐた。
隣^{となり}の部屋^{へや}では若^{わか}い人^{ひと}たちが明日^{あす}の行^{かう}動^{どう}について遅^{おそ}くまで語^{かた}り合^あつてゐたがそれも絶^たえた。

夜は死のごとく静かであつた。わたくしはランプを消して寝た。しかしどうしても眠れないのでガラス窓越しに空を仰いだ。

わたくしは肅然として大きな自然の前に魂を撃たれた。

海拔五千尺の梓川の礫は數里の間を霧につままれてしまつた。そこには山を戀ふ若い人たちの幸福な眠りが草のごとく静かに息づかひしてゐる。

その若い人たちの静かな草の夢を見守るかのやうに梓川の礫をめぐつて東西南北に一萬幾百尺の穂高や、焼岳や、安房や、霞澤岳や、さらに鎗や、赤澤や、常念や、蝶や、大瀧の山々が夜のとりてのごとく静かに暗く天にそびえてゐる。

天には雲一つなかつた。山はすてに秋のごとくつめたかつた。霧のやうな銀

河が梓川を横切つて穂高の肩をかすめてゐた。何といふ黒い山であらう。まことに巨人のごとき穂高は半天の星のまたゝきをこざして暗のなかにそびえてゐた。

梓川は朝霧につつまれてゐた。水柳は露重く眠つてゐた。

鎗、穂高の雪溪から島々にいたる十余里の間梓川は鐵のごとき懸崖に抱かれて帶のやうに流れてゐる。雪に解けて流れ落ちる花崗岩の砂は梓川の礫を銀よりも白く美しくしてゐる。その青い水と銀よりも白い礫をさしはさんで十余里の間を翳々たる細葉につんでゐる水柳はまことに上高地の黒い岩山のあひだに見出さるゝ唯一のなごやかな夢の巢である。

岩燕は水柳のやはらかな葉蔭に故郷をおもふべく、山を戀ふ若人たちは水

柳のほとりに山を思ふべく、人を思ふてあらう。

穂高の雪溪には夜明け方の日の光りがばら色に漂うてゐた。山はまだ鐵のごとく黒く冷たかつた。

窓によりかゝつて山をながむれば、まことに氣澄み骨冷ゆるを覺える。

小梨平を過ぎ、幾度か丸木橋をわたり、徳本峠の方へ元來た道をたどると一里ばかり。梓川を横切つて木立の下をくゞれば明神ヶ池である。

このあたりにしらかばの皮の無残に剝ぎ取られたのを見た。ふかき憤りを感じるのはわたくしひとりではあるまい。山を愛することを知らぬ人は呪はれてあれ、たゞ一人の男のエゴチックな心を充たすために幾千人の山を愛する人々の心は暗くされる。

池の直ぐ手前に嘉門次爺の小屋がある。小屋のうしろにはつたうらゐの花が白く咲いてゐた。雨が降りつゞき、川があふれ誰一人訪ぬる者もない日など二日でも三日でも水に浸された小屋のなかに黙々としてたゞ一枚の床板上に眠つてゐたといふかれのおもかげを想像しながら池のほとりへ歩む。小鳥が美しい聲で鳴いてゐる。

池は一つであるが、中程に岬のやうな木立が突き出てゐるのでちよつと見れば二つのやうな形になつてゐる。直ぐ取付きの池はきはめてシンプルな形である。水は深く明るい。奥の池はさらに深く青い。岩魚が遊んでゐる。池は黒い森林につまれ直ちに明神岳の根に接してゐる。碧珠のやうな水面には明神岳の斷崖が影を映してゐる。そこはかつて嘉門次爺がいかだして

岩魚を釣つてゐた池であり、かれの子嘉代吉が溺れ死んだ池でもある。

自然は時として人工以上の巧さを弄ぶ。こゝにも幾個の小島がある。小

島といつても枯淡清明まことに掬すべき大きな庭石である。その一草一石の

布置、稚樹の配列、老木の姿態は天工の妙をつくし、微をきはめてゐる。

大きな島、小さな島、その間を珠のやうな水と白い藻の花とがつらねてゐ

る。水は重くかゞやいてゐる。静かに茶を點じて眺むべき泉水である。心な

き旅人にとつてはほとんど何んの感銘をも與へないであらうほどあまりに自

然的な、靜的な、幽邃な、枯れ過ぎた天工である。春のごとく明るきがうち

に茶の寂をたゞへ、禪家の靜觀を籠めてゐる。わたくしは金閣寺の庭を聯想

した。それよりも一層山科勸修寺あたりの庭を聯想せしむるものであり、さ

らに深く、寂びたるものである。池のほとりにはしやくなげが咲いてゐた。

わたくしたちは梓川沿ひに牧場を横切つては放牧の子馬のたてがみをなて

さらに上流二里鎗見河原へ急いだ。老木の蔭の深く、下草のやはらかな牧場

は奈良の浅茅ヶ原あたりをさらに幾百倍したる感がある。深山のひめゆりの

木ふかき蔭につままれて、つましやかに咲いてゐるのを見る。

穂高の雪溪を背にして放牧の子馬の群が梓川の清流を横切つて嬉戯してゐ

る小點景を見る。まさに天品である。

牧場を通り過ぐれば徑は懸崖に沿ひ、清流を俯瞰しつゝ幾度か棧を渡り、

丸木橋に足をすべらす。

足をさぐめては脚下の清流に見入る。

アルプスの雪が溶けて翡翠のやうな淵を作つてゐる。まさに翡翠よりもか
ゞやかに磨かれたる流れてゐる。礫は銀よりも白い。

横尾の屏風岩、赤澤、常念、一の股、二の股を望むやうになれば間もなく
鎗見河原である。雪崩に打たれて父子ともに死んだ喜作の名をさぐめてゐる
喜作新道が赤澤の横の匍松地帯に高く一部分を雲に包れてゐるのが見える。

川をへだて、赤澤の左手に、穂高の後方にもものすごいほどな赤黒い鎗の尖
端が蒼天に沖してゐる。それにつゞいて左方に大雪溪を抱いた岩山の尾根が
長く天を走つてゐる。

青い大空に接するばかりにそゞり立つた赤黒い岩山の鎗の姿は旅人の心を
おびえさせる。鎗見河原から見たいかにもかたい鋭い岩山の感じ、更に赤黒

い岩山の肌は北齋の富士に似てさらに峻にして硬く、物すごいものである。
更に孤獨にして冷厳なるものである。空を被うて鬼氣迫るものである。

超人のごとく孤獨にしてさびしくものすごい青空の鎗をながむれば魂わ
なゝき何となき悲しさの胸にわくを覚える。

ふたゝび牧場の方へ道をもどつて徳本峠に達したのは午後の五時であつた
すぐうしろから峠をのぼつて来た牧場の男たちは今しがた穂高の雪溪に熊が
あらはれてゐたことを話してゐた。

「あの雪溪には昔から熊がよう出たものだ。わしは嘉門次爺さんからそんな
話を幾度も聞いたことがあつた。」一人の男はさういつて振りかへつては穂高
の雪溪をながめてゐた。

徳本峠に立てば穂高はさらに高く、上高地は銀よりも白い梓川を抱いてさらに静かに横たはつてゐるのを見る。丸山氏にならつて神河内と呼ぶにいかにもふさはしき別乾坤なることを悟る。

牧場の男たちは峠の木の下の下にかもしかの毛皮をひろげて穂高をながめながら酒を酌んだ。

わたくしたちは走るやうにして山を下つた。

岩魚留の茶店の幼い子供たちは今朝山から捕へられて来たばかりの野兎の子をおもちやにして抱いてゐた。可憐な野兎の子はすでに死んでゐた。山から捕へられて来た兎の子の外におもちやを持たぬ山の子をあはれと思ふ。さらに山の子らにおもちやにされて死んでゆく野兎の子を。

上高地の最も美しい季節は九月の下旬初雪のころである。山には淡雪がかり、雪に隣する匍松、いらかばの森林地帯はもみぢに燃え、上高地の草は青く梓川の水は白く、たま／＼秋の落日が穂高のいたゞきに黄金の雲を揺曳せしむる時、眞に上高地の美はきはまる。

わたくしは丸山氏のかういつた物語りを思ひだしながら峠を下つた。

けさ上高地の「五千尺」を立つて十三時間歩き続けに山を歩いて夜の九時眞暗な島々の宿に着く。

わらぢの紐は無残にも切れてしまつてゐた。(完)

狩
勝
峠

河東 石杉 桐

—

峠たふげの信號所しんがうしよに下車げしやして、所長室しよちやうしつで一服びやくする間まにも、國境こくきやうを吹き渡る風かぜは、
さすがに肌はだに冷たい。

徒歩とほで越こした昔むかしの狩勝峠かりからたふげは、あの頂いたゞきの尖とがつた山やまの向むかうべらだつた、と軒端のきは

にそゝり立つ山々を指呼する。突如として、それらの山々に雲の脚がかゝる。雲の脚は疾く尾根をかけずり下りて、谷を襲ひ、峽を埋める。われらもまた雲中の人となる。

「けふはどうも日和がどつとしねえだ。」

いふうちにも、ケロリと晴れ渡つて、けふ初めて夏らしいといふ日影が漏れる。

「あつちべらは(十勝方面)かうてもねえだらうが……。」

きのふまで連日の雨であつた天候は、少くも展望に不安な氣をたへてゐる。

トロの支度が出来た。

汽車で通過してしまふのは、あまりに呆氣ないので、特に好意的に仕立てられたトロなのだ。

普通のトロの兩側に張り出しの板をかすがひ止めにして、青々しいゴザを敷き詰めた、トロの上にしては、廣々とした、ずつとお通り下さい、といひたげな新座敷なのだ。

座敷は、わざく、出迎へに見えた人々、運轉技師、技手等で満員の盛況。かうなると、ビールにお肴の一つ位は、と大きに遊覧氣分をそゝる。トロが出なければ、わらぢばきて、十二三哩突破の覺悟をきめた勇氣も出端をトチつてしまふ。

滑らかに鐵路をすべり出したトロは、すぐ峠を貫通するトンネルに吸ひ込

まれる。徒歩で十五六分、トロで七八分のトンネルなのだ。

運轉技師のカンテラを唯一のヘッドライトにして、技手へのキャブテン式命令。

そろくやれそろくやれ。

トンネル中程の天井巻きかへの工事をやつてゐる。アセチリン瓦斯をともしてあし場を組んでゐるのが、トロの張り出しにさはりさうなのだ。ゆつくりと思つて張つた板が、少し廣過ぎたのだ。折角の新座敷も、ビールではなくて、少々危険味を味はせる。

そろくやれ、そろくやれ。命令が、頻發して来る。沈んだ重い調子が洞窟の暗さと濕氣に沈澱して響く。

トロの齒止めに立てた二本の丸太が、組みかけた天井の足場につかへる難關を通過して、ホッと一息すると同時に、出口の黎明がほのかに足もを照らす。總ての災禍をのがれたものやうに、トロも喜びと満足のれきらくの音を立てる。

トンネルの出口、十勝の方からは、その入口近くに「御展望の地」と札を立てゝゐる。東宮でおはした、今上陛下のお召列車をさどめた地點である。

われらもそれにほどりして、草をふみしめて立つ。

左手に頭を半分そりかけにしてやめたとてもいひたい半面の草山が、脚下にウエルカムをしてゐる。谷にきり残されたしらかばの林はそれを喝采するやうに、一様に葉をそよがせてゐる。草の中のたくましい猛者ぶりのいたど

りは彌次氣味の裏葉を煽りつゞけてゐる。

右手の峠の頂きは、ホンに一呼吸して上り得る、目と鼻の間にありながら、時には一抹、時には洶湧する雲の去來にいそがしい。あの頂きに立てば、といふ展望のハンデイキャップも、けふのわれらには恵まれなかつた。

眼下に遠く新得村の神路山だといふ、さして愛嬌もない山を限りとして、六百里の平原も徒らに雲漠々、天悠悠。

狩勝峠の俯瞰的眺望を更に雄大にし、遙に太平洋の波濤をも双眸にをさめんには、この峠の守護神のやうに立つ、サオロ岳に登らねばならぬ。

試みに地圖を開いて見ても、北海の第一峰旭岳をはじめ、第二峰の石狩岳、活火山として十勝岳それらの峻峰は、皆石狩十勝の國境に蝟集してゐる。サ

オロ岳はその大山彙の末流に位して更に十勝日高の國境に連亘するトツカベツ山彙の起點をなすものなのである。

今から約百年前この地を跋涉した松浦武四郎の「十勝日誌」にも、その實地の測定圖に「サオロ岳」の名を記し「シノマンサオロ」「ノシケサオロ」「ハナリシサオロ」等サオロ岳より發する十勝川の源流を探尋してゐるのである。

十勝石狩のアイノの大争鬭をかました時、能辯な少年が、サオロの高原に乗り出して、十勝アイノの酋長を説破したといふやうな、傳説もまた山川草木に心ある彩りを與へるのである。

それなのに、けふはどうしたものか、サオロ岳がちつとも笑顔を見せぬ。雲のベールをさらぬ。半分取りかけたかと思ふとまたかかふる思はせぶりな。

トロはやがて環状線の大カーヴを快走する。汽車に乗って行くやうな濁塵騒響がない。窓から首を出すやうなところははれがない。脚下に出没する丘陵樹帯草徑、左右に展開し、前後に生動する。天風に駕御するのいはひである。何ともいひ知れぬ香氣が漂つてゐる。さわやかな温かな、さうして若き戀をさへしのばせる。

自由に展望を開放されて、空にみなぎる香圍の世界に住む。

トロはごまつた。

今頃咲く花は、どれもよう匂ひますで。

最初に折つて來たのが、そこらにやたらに咲いてゐる薄紫の房々した花だ。なる程澁くさい。少しむつとする香氣がある。この邊では、女郎花とい

つてゐるさうなに洒落れたのが鬼郎花だらう、て大笑ひ。

次ぎは、サビタ花だといふ。サビタといへば、煙草のバイブで一ト頃は天下を風靡した名であつた。雌花の粒々塔を形づくる側に、十字花に似た雄花が、雌花に遊ぶ蝶のやうに介在する。總てがまじり氣のない純白に輝いてゐる。洗鍊された、眼まで涼しくなる香氣は、ひしと胸に抱きすくめたくもなる。

されど、快走するトロをとどめさせた匂ひは、それらではなかつた。

線路を離るゝ百歩、そこらに原始林の名残をとどめた、まばらにすくくと立つ木がある。梢から下枝まで、蜜の沸き立つたやうな花だ。その一枝を折りかざして來る。われらを香圍の世界に包んだ主は、まさにこれでなけれ

ばならなかつた。小粒なあざみのやうな花の一群れくは、かつてローマ情調をそつたミモーザのそれであつた。ミモーザの香ひでもあつた。ミモーザを野生にし、原始に還元し、曠原に解放したにほひてあつた。

こゝではシナといふ。木へんに品の字を書くといふ。

土地の公園には、櫻を植るといふやうな月並な考案を脱却して日本第一の平原には、シナの大森林を形成して、一般遊覽者を香殺すべしてはないか。

二

もうすゝい、きも穂に、はぎもをみなへしも花に、ごらのをは尾長な紫を立てつゝある。高草の茂れる中に。

その高草の刈られてある處に、いくつかの土まんぢうが見える。曾てこの峠に迷ひ入つた開墾當時の犠牲の塚てもあるかの幽鬱な懷古感をそゝる。

今日までに幾人の松浦武四郎があり、近藤重藏があつたであらう、もつと冒險な探討に従ひ、もつと有効な事務を擧げてゐたであらう。が、熊に食はれたか、密林の毒氣に中つたか、名も知らぬ地に、幽魂の恨みを埋めて、永へに酬いらるゝものもなく葬り去られてゐる。誰に恨みを漏らすべきでもなく、満足の安眠についてゐる。曠野に咲く花は、その手向けの花であり、峽谷に鳴く鳥は、その禮讚の聲でもある。どうせ役にも立たぬ人事の閑是非に

累わざはひされるくらゐなら、野のの花はな、山のの鳥どりを永劫えうごうの伴侶はんりよに選えらぶかれ等の達見たつけんにも思おもひ切きつた男性味だんせいみがあるやうだ。

あれはばつた塚つかで、この邊へんに五百いくつもあるといひます。

新得しんとく村助役むらじやくし氏の説明せつめいによると、今いまから十四五年ねんの前まへ、石狩いしかりの方はうから、ばつたの大群たいぐんが、總すべての畑物はたけものを荒あらして、この峠たふげを越こさうとした。網あみを各所かくしよに張はつて、辛からうじて十勝としかちへの侵入しんぱふをくひとめた。ばつたの死屍ししるふく累々るるとして山河さんかために時ときならぬ黄きに染そんだといふ。

支那しなの日光にっこうをふさぎ、鐵路てつろの進行しんかうをこゞめる雲霞うんかのやうな蝗害くわうがいのそれにも似にて、北海道ほくかいだうの地勢ちせいのさすがに大陸たいりく的てきであることを思おもはせる。

人間にんげんの塚つかであつてほしかつたものがばつたの塚つかであつたことは聊いさゝか拍子ひやくし拔は

けする。けれども、ばつたもまたこの世よに生せいをうけたものだ。大おほきなもぐらの盛りもあげた土どまんぢうであるよりか、何程なにほどか佛性ぶつじやうに近いちか。南無なむ婆多ばた頓生どんじやう菩提ぼだい。

さびた咲さく花草はなぐさの刈かりある草くさの高々たかたか

ト口くちを新得しんとく驛えきに捨すてる。

驛えきで賣うる辨當べんたうの中なかに、天下てんかに類るゐのない誇ほこりを持つもつやまめ鯨すしがある。

新得しんとく驛長えきちやうは、更さらにやまめ通つうの天下てんか第一だいいち人にんと稱しょうしてゐる。

やまめといふ魚うをの特色とくしよくは、雄オスがあつて雌メスのない點てんである。どれほど白子しろこを持つもつやまめを釣つり得えても、未いまだかつて眞子まこを持つもつ雌メスを見みないのである。もし眞子まこを持つもつやまめがあり得うるなら、何程なにほどの懸賞けんしやうにも應おうずるのである。やまめ

いはな、さくらます、ひめます、或はかばちつぶ、それら淡水魚の相似相違の動物科學的研究は、單に暇つぶしにする一竿の釣人の與り知るころてはないのである。

それではどうして、やまめが年々新得驛の名物の鮭になる生育をなし得るのであるか、そこにはますとやまめ、或はいはなとやまめ、それらの同種屬の間に存する魚族の神祕が働くものと想像しなければならぬ……。

これは又不意打ちに淡水魚の奇形的存在を浴びせ説くものかな。やまめの眷屬にこの大發見を報告する光榮を荷ふのも、何となく天下の大平原を背景にするふさはしい一エピソードな氣がする。

明治四十年といへば、丁度二十年前にあたる。釧路から帶廣まで汽車で來

た私は、石狩の落合驛まで、國境を徒歩で越さねばならなかつた。帶廣の宿で晝餉をすました後、ベケレベツ(今の清水驛)まで馬車があるといふので、法外と思ふ賃錢を拂つたが、その馬車といふのは、一頭立の荷馬車であつた。

四月の雪解け道は、泥濘車軸を没するばかりで、行路つぶさに艱難を極める。馬丁は芽室の驛亭に泊つてくれと哀願したが、私は約束を楯にベケレベツまで行かうとした。芽室の驛亭には、仇な女の姿が、旅やつれした者の眼を射つた。

やがて一點の燈火もなしに、暗夜の道を馬まかせに行くやうになつた。空は重々しく曇つてゐた。風も死んでゐた。はるか右手の遠くに野火の明りが地をはうてゐた。

頑強な旅人も、退屈と不安に堪へられなくなつて、折節目に入つた燈、耳にきこえた赤ん坊の聲をたよりに、とある百姓家に一泊の哀れを乞うた。それが「シントク」といふ村であつたのだ。

今は清水と新得が入れ違ひになつてゐるが、シントクの名によつて起こる私の想ひ出は、奇形なやまめの存在のみではない。

その頃はまだ原始林のまゝであつた、なら、たもの潤葉樹が——まだ芽も吹かない冬木が——天を摩して立つてゐた。

馬糧にするこくさを、二頭立の荷車に山と積んだのに幾臺も遭遇した。私の乗つた荷車も、一束のこくさをつけてゐた。帯廣の遊廓を木賊原といふのも、先づこくさの野生林をさり開いた因縁に基づくのだ。

今は廢道になつたといふ昔の狩勝峠の方が、山や丘の邪魔物なしに、もつと十勝平に親めたと思ふ。さうして、石狩、旭の峻峰を大平原の好対立として望み得たと思ふ。私はその時、覺えず口走つた言葉を今に記憶してゐる。

野もだ、廣いが、山も野ほうづに大きい！

帯廣は、十勝平原の首都である。六百里大平原の中樞である。狩勝峠を通過して、この平原の茫漠味に觸れようとするには、少くも帯廣を訪はねばならぬ。慾をいへば、汽車便をかりて釧路に出るか、自動車を利用して、十勝川の河口大津に出づべきである。

私の帯廣入りは、馬の子がその何條通りかの町中で草を食つてゐた時分の舊情をあたくめる意味もある。

帶廣に着いた翌早朝、然別湖を見に自動車を驅つた。然別からの展望は、狩勝の展望より出藍のほまれがあるからだ。狩勝の展望がその縦観であるなら、然別の展望はその横観であつた。あれが主人であるなら、これは妻であつた。主人の禮装をのみ知つて、主婦の響應を享けなければ、十勝平原の全幅を語るには足らない。

鹿追村を過ぎて、賣幕村に着く。行程約十二里。

開墾當時の大森林地帯は、時に伐るにも頼り毒樹雜木であつた。いきなり火を放つて、火力でそれらを征服するの外はなかつた。その白枯れの記念がすく／＼と隨所に骨立してゐる。今なほその燎原の苦を語りたげに。枯れ立つた幹、削り磨かれた枝、もう死灰にも等しい骨々しい中から、生

の執着の若芽を沸き立たせてゐるものもある。白骨と綠葉、それはあまりにエキゾチックな色の配合でもある。死と生のあまりに撞着した争闘でもある。生きる悩みなどいふセンチメンタリズムを突破して、生きる力の潜在的強さと粘りに想到すべきである。

ヤクザな鈴を振るやうな、ヤケに甲高い蟬がなく。北海道の蟬は地下に十年の幼虫の永い間を過ごして、僅に一日二日の成虫の生を鳴き暮すともいふ。ヤケに甲高いはずだ。

生の執着はこゝにもある。立ち枯れの大木と共に、平原情調は、背景に音楽に、正に至れり盡せりである。

賣幕——なぜ瓜幕と書かなかつたか——て馬に乗りかへる。

米國べいこくで十數年じゅうすうねんも緬羊飼育べんやうしよくを経験けいけんしたといふ小室緬羊主こむろべんやうしゆの風ふうぼらに接せつする。氏はいよくこの地ちにその牧場ぼくぢやうを選定せんていして、愛妻あいさいと共に猷身けんしんの努力どりよくを拂はらふといふ。けふがその飼育場建築しよくぢやうけんちくの棟上げだといふ。われ等の前まへに横よこたはる、象ざうの鼻はなのやうな低い丘かを指ゆさして、けふから「羊が丘ひつじをか」と命名めいしたといふ。蓬ほう髪はつ垢く面めん、真率しんそつ恬淡てんたん、この寒村かんそんにも咲く遊蝶花いうてふくわのそのやうに、氏しの風ふうぼらは正まさしく明あるかつた。若もし然別しかりべつが、行ゆくく北海名勝ほくかいめいしやうの地ちとしてのびゆくなら小室緬羊牧場こむろべんやうぼくぢやうは好個かうこの添景てんけいでなければならぬ。

われ等の馬うまは、小室氏こむろしの命名めいした「羊が丘ひつじをか」にたどりつく。

丘上かみうへは一大競馬場だいいけいばぢやうにも充當じやうたうする高原かうげんである。左手ひだりてに内地人ないちじんの女夫山めをとやまといふ肌はだの滑なめかな二峰ふたが、この高原かうげんに君臨くんりんして立つ。十勝平原としかへいげんを吹ふきあげる長風ちやうふうが

この丘かをすべつて、女夫山めをとやまをなめて行く。

驚おどろくべきことは馬蹄ばていにさはる葉強はごはな小笹こささのやうに見みえてゐた、それがすいらんであつた。こゝではすいらんは、たゞの野生やせいの雜草ざつさうであつた。すきまもなく生おひ茂しげつた、すいらんのしとねであつた。方十數町はうじゅうじやう、殆ほとんど他の草くさを交まじへない香蘭台地かうらんたいちであつた。

この花はな一齊せいに開ひらく春はるを想おもふ。南風なんふう吹ふけば香霧かうむ漲なり、北辰ほくしん傾かたむけば芳嵐ほうらん渡わたる。それは兎うさぎの遊あそぶ伽だまの國くにであり、熊くまの踊をる夢ゆめの世界せかいである。

香蘭台地かうらんたいちを過すぎ、一谷ひとくを隔へて、女夫山めをとやまの裾すそを爪先つまさき上ありにのぼる。

展望てんぼうは一歩ひと々くに廣ひろがつて来る。

平原へいげんの横觀わうくわんも、まだ底晴そこばれぬ雲くものために帶廣おびひろの町まちさへ、それと方角ほうかくが立た

ない。秋の晴れくしい天高く氣澄んだ時、遠く大津までの大觀の展開すべき、この好位置に立ちながら。

されど、女夫山の裾野の、波濤を形づくるやはらかな曲線美は、處々に點在する潤葉樹林と交錯して、理想的な高原美を裾長にならべてゐる。針葉と潤葉の配色は別として、スイスの低山性高原をより自然にほうふつせしめる。箒をあてたやうに美しい。なめたやうに艶々しい。豆の花さく耕作地はこの高原と參差して、末廣の扇を果てしもなく押ひろげてゐる。

三

遽然一事變が起つた。

われ等の行くさきに、ラツバの音が斷續してきこえるのだ。熊にでも遭遇しなければ、吹くべきラツバではないのだ。

「この邊、熊の出ないのが、まア取柄でさあ」と、今もいひつゝ來たのであつた。

然別湖から下りて來た徒歩の三人が、顔を蒼白にして立つてゐるのに逢着した。「そこへ熊が出ました」といふ。まだ子熊が一匹あの木の梢に残つてゐるといふ。梢に黒く見えるのはその子熊だといふ。

われ等より一足先きに出發したラツバを吹いた人は、熊を數十歩の前に見た、あまりに意外な出來事を語つた。初め行く手の頭上の草の中に隠見する怪物を發見して、試みにラツバを吹いた。昂然として立ち上つたのは、三匹の子をつれた大きな熊であつた。總身が赭く、尾のあたりが黒かつた。三匹の子熊は、猫の子のやうにするくく木にかき上つた。親熊は五間逃げては振り返り、十間去つては、又立ち戻つた。その中二匹の子熊が木をすべり落ちて親熊の跡を追うた。と、逸早く山上の樹帯に姿を沒した。一匹の子熊はあまりに人の近さに、途方にくれてゐるのだといふ。

一行六人、三四十歩を離れた樹上の子熊を仰いては、互に顔色を窺ふのみだ。

湖邊の驛亭の主人が、もう大丈夫だといふにつれて、一行はラツバを吹きつゝ、子熊を後にして女夫山の峽間を志して馬をすゝめた。子熊一匹を残してゐるだけに、親熊の出沒は、いつどこに計り知られないのである。

私にしては、先年九月三十日上高地温泉を去る一里ばかり、穂高山麓で、矢張子熊をつれた親熊に、二三十間の距離で逢着した以來、二度目の御馳走であつた。

十年この地に住む人も、幾度その糞や足跡に接しながら、未だかつてその正體を認め得なかつた熊なのだ。

山の風はすゞしいといつても、草のいさは、馬上でも汗ばむほどの暖かい日であつた。どうして眞晝の暑氣を追うて、かゝる草本帯の低地に下りて

来たのか。

變つた御馳走、熱誠な歡迎も、少々奇抜に過ぎた。

女夫山の鞍部、扇の原をすぎると、光景が一變して、高山性針葉樹帯が、まだ斧鉞を知らぬ莊嚴さて身に迫つて来る。あたりの山々も、ふもとから頂きまで、原形の處女林が、太古の神祕をさゝやくかに森閑としてゐる。

下ること五六町、われ等は湖水の落ち口に馬を捨て、そこにつつてある木板をつちて打つた。

頓狂な響きが、湖面を渡つて四山にこだまする、四山の處女林が、ガサツなその音をひんしくする。へまな音をさせるので、三舎を避ける熊もあらう。水べにはしやくなげが多い。つつじが多い。處女林と湖水のふちどりをし

て咲く自然な刺繡をしたやうな四月の春を想ふ。悠長にかいても漕いで来るのか、と思つた驛亭の迎への舟は、小さいながらモーターボートであつた。尤もそこにアイヌの鉦てくつたらしい獨木舟が一隻繋いであつた。この湖に浮ぶにふさはしいう、つるふね、さういふ詩情を胸中に秘めてゐる者のあることを、山の神、湖の主も照鑑ましましてゐるであらう。

湖中に小さな辨天島がある。その島のあたりまで遊弋すると周圍四里の湖水に臨む山々の形も甲峰没して乙峰現れ、重疊參差、悠揚迫らざる變化を呈する。いゝことといふ程ではないかも知れぬがこの邊の山になると誰も名前を知らぬ。アイヌ語の名さへついてゐない。とがつた山、丸い山、肩の張つた、腹の出た、で一々の指呼にもどかしい興がある。やがて多くの物知り

が、字面だけ美しい、併しながら環境には醜い命名をその處女林に彫りつけてくれるであらう。

北海道の湖水といへば、大沼、洞爺、支笏、阿寒の四湖に限るやうにいふ。風致の大小はあるにしても、千年の唐檜のたぐひが、惜し氣もなく立枯れて、原始の林表に一異彩を添へてゐる。この然別湖は、その第五湖に伍し得る資格を誰が拒み得るであらう。十勝の平原住人が、狩勝峠にこの湖水を結びつけて、變化と曲折を遊覧客に與へようとするのも、あまりに當然な親切であつた。

「然別」など、殺風景なあて字をしなないで「叱鼈」とても思ひ切つた字面を選べばよかつた。しかりべつをもじつて、光鼈湖——ひかりべつ——でも

いへばよかつた。イヤ、さういふ詮索をしてゐると、環境に醜い命名を敢てすることになる。

湖畔の驛亭で、この湖水でとれる三四尺のいはな——岩魚——の刺身の御馳走になる。水深二百米の湖底にすむいはなは、河川にすむいはなと、又別ないはなを適者生存的に形成するらしい。肉の朱色はむしろ臙脂に近く、さつきのつつじか、血の紅葉を欺く。これがいはな屬であるか、ます屬であるか、それともいはな屬とます屬の混血屬であるか、さういふことはしばらくいはなの味に舌鼓を打つ。

驛亭近くにぬるまながら温泉がわく。夏知らぬこの地は、樹光水色と、もに、多くの誘惑味を持つ。ゆつくり晝の甘睡でも貪つて行きたいものを。(完)

室戸岬

甲子私袋

—

宇多うたの松原まつばらに行つて私達わたしたちははじめて自動車じどうしゃを下りた。それにしても何なんといふ滑なめらかな愉快ゆくわいな疾走しつそうであつたらう。それはとても關東くわんとなどでは想像さうぞうだも出で來きないやうな立派りっぱなドライブ・ロードである。野中兼山のなかけんざんの名なを不朽ふくきうにした堀ほり

割。そこに満ちあふれて流れてゐる綺麗な水。昔はこゝいらは海であつたらしい大津の村落。後免町に入る少し手前のある集落の農家には、非常にめづらしい土佐特有の尾長鳥がゐるといふ話であつたけれど、それは歸りにするににして、私達はたゞまつしぐらに一氣に飛ばした。やがて通りの狭い、一風違つた家並のつゞいてゐる後免町がやつて來た。ジツクザツクした、少し屈曲した、いかにも土佐の田舎町らしい町だつた。しかしそれもほんの一瞥だけで、すぐ通過してしまつた。と、忽ち東北の連山があらはれ出した。それは全く連嶺の起伏で、香美郡東北方の嵐翠がそれと湧くやうに一目にそこに展げられて見えた『大柄はこの見當になりますかね?』私は私とならんで腰をかけてゐるM君にきいて見た。私はその山深くその水源地を持つてゐる物

部川の溪谷をそれとなしに頭に描いたのであつた。『さうですな、この邊になりませう……』M君はかういつてその少し東にあたる方角をゆびさした。物部川の大橋はやがてやつて來た。ひろびろとした石原で、水はわづかに數條の線を成して流れてゐるにこゞまつてゐた。しかもそこは土佐日記にある大港のあつた地點で、昔はその河口は帆檣林立した和船の港であつたときいてゐるだけに、何となくそのあたりがなつかしまれた。野市、赤岡——そこを通り越すと、もはやその宇多の松原は近かつた。そこで下りた私たちの目には、田舎のあばら家二三軒と、赤い旗の出てる氷屋の店と、太い太い二三本の松と、その松の中に埋められたやうになつてかくされてある小さな村の祠とが映つた。貝殻のまじつた道。草の中をり

をりなで、この咲いてゐる道。それを突き當ると、手結まで行つてゐる汽車の小さな停車場が、夏の晝近い明るい日影に照されて、そこに驛名を記した白い板の立てられてゐるのが眼に入つた。しかもあたりはひっそりとしてゐて、その小さな田舎の停車場が松やら草むらやら西瓜畑やら桑畑やらの中にびたりさうまく雑り合つてゐるやうに感じられた。昔はすぐ近くまで波が打ち寄せてゐたであらうといふこともそれとはつきり呑み込めて來た。

「ちよつと好いですね、この停車場の感じは？」

こんなことをM君はいつた。

その左と右とが昔の宇多の松原であつたといふ。そのあたりは一面の松であつたといふ。そこに汀線を成して波が打ち寄せてゐたといふ。その松の梢

に鶴が集まつてゐたといふ。今ではそれははつきりとは行かないが、兎に角それこそその位置の指點されるだけのあとがそこに展開されてゐるのを私たちは見た。私は途切れ途切れにそこに一叢、かしこに一叢といふ風に、その太い松の樹のつらなつて叢生してゐるのをじつと眺めた。

私たちは草原の中を五六間向うまで入つて行つた。ばつたが飛んでゐるのも私にはなつかしかつた。レールの向うの草むらでは、きりぎりすが頻にギギといつて鳴いてゐた。

宇多の松原から少し向うに行つたところには、土御門天皇が幡多から阿波にうつる時に上陸されたといふ地點があつて、そこに月見山などといふ緑樹の深い小さな丘がこんもりと立つてゐた。次第にあたりは海の碧に近づきつ

、あつた。漁村らしく貝殻を載せた屋根なども續いた。丘と丘とに、はさまれたやうになつてゐる水田なども見えた。自動車は頻に走つた。次第に手結山近く行つた。

海に出たと思ふと、そこに明媚な松原があつたり、瀟洒な海水浴場があつたりして、出来てまだいくらも経たないやうな旅舎や料理屋がそこゝに澤山に點綴された。さつきの汽車はそこまで来て、こゝを一時の終端驛としてゐる。つまりこゝがかうして開けたのもその交通によるものだといふことがそれさうなづかれる。『一夜ぐらゐ泊つてもいゝやうなところですね』私はこんなことをM君にいつた。手結の濱。手結の山。それを越えて行つた時の感じは、長い後までも忘れられないであらう。徙崖のみが持ち得る眺望——海

が入つたり出たり、山が延びたり縮んだり、斜阪をずつと折れ曲つて入つて行つたかと思ふと、忽ちその一角がほどけて、遠くに蒼い海と突出した鼻とを見るといふやうな光景がそれからそれへとつゞいて行つた。段階を成した水田。せんくとして崖の間から落ちてゐる小さな溪流。昔は道がもつと上の方にあつたので、そこから今の新道に移したのださうだけれども、兎に角あの江藤新平が阿波境の甲浦でつかまつて、それから野根山を越して高知に護送される時に休んだといふ焼餅屋、その婆アさんがいまだに生きてゐて、その時の話をするといふのもなつかしかつた。そこでは運送車の土方などがその涼しい樹かげを好い休み場所にして崖から落ちる清水などに呼吸を ついてゐるのを私達は目にした。

しかし自動車はさうした時代おくれの光景には目もくれないといふやうにしてたゞまつしぐらに走つた。と山合のさびしいところに、茶屋見たいなものが一軒あつて、こゝに田舎には目立つ白粉の女が五六人集まつてこつちを見てゐるのに私が目をよめて、あれは？とさきと、そこは猫谷といつて、土地でも名高い魔の谷だなど、M君が笑ひながら話した。何でも郡と郡との境に立つてゐて、さういふことをやかましくいふ人だちの監督の手も、そこには十分に行きわたらないのだといふことだつた。『猫谷は振つてる、好い名だな！』などといつて興じてゐる中にも、自動車はぐんぐんその前を行き過ぎてしまつた。

安藝氏と長曾我部氏との運命を決した八流れの古戦場が、やがて私だちの

前に来た。それは半は阪て半は高原といつたやうなところだつた。小さな谷が幾すぢもあつて、ひよろ松がそれに並び、その向うの高原をあをい静かな海が縁どつてゐた。遠くて波濤の音もきこえるやうな氣がした。ふとある崖の角を曲つた時、私はいきなり聲を擧げた。

『あ、室戸が見える！』

M君はそつちを見て、

『や、違ひはしないかな？あれが室戸かしら？行當ぢやないかしら？』

『いや、たしかに室戸だ！』

私はきのふの曉に汽船でその鼻を通つたことをくり返した。まだ明けきらない曉の空にその鼻がくつきりと黒く浮んで、半腹にあるその燈台の灯

が靜かにピカリと光つてそして回轉してゐたさまをくりかへした。何ともいはれないほどその岬端にあくがれたことをくり返した。

「あ、さうかな……」M君は忽ちその説をあらためて、「あ、仰しやる通りだ。たしかに室戸だ！行當かと思つたら、行當は手前に、そら、薄くく重なつて見えてゐますね……。同じやうな、恰好をしてゐますからね。」

「あ、あの少し短い？」

「さうです……」

長い卓を二脚も三脚も海の中にならべてゐるといふやうなあたりの地形は、私の心を動かすのに十分だった。海は思ひ切つて青かつた。深いのが知れた。

「一番大きいのが室戸で。それから五六尺短いのが行當で、それからもうひとつ、ぐつと短くつて、ぼつりとされてゐるのがありますね？」

「え、え……」

「あれが羽根の鼻です」

「あそこをずっと通つて行くんですね？」

「さうです——」

私はぐつと深く眺め入つた。大きな海、といふよりは大きな岬、三つ重なり合つたその形の雄大さは、何ともいはれないやうな心持を私に誘つた。自動車は大景を前にして、その滑らかな阪をぐるぐると廻るやうに下りて行つた。

岬角をめぐつてゆくやうな路には大きな根上り松で綴られた濱などもあらはれ出して来た。薄紫の花の咲いてゐる濱梨、緑の葉の半沙に埋れてゐる防風、いかにも荒海の潮の香をかぐといふやうなあたりのたゞずまひとなつて来た。簷の低い漁師の家なども次第に多く、ともすると、目も覚めるやうな夾竹桃の赤い花などもまじつて咲いてゐた。和食の濱では、この松原は是非見て置いてほしいなどとM君にいはれて、自動車を下りて、その沙の白い松の影の濃やかな海岸を歩いて見た。見事な根上り松が一帶に靡いて、他

に何處にこれほど大きな松原があるだらうかと思はれるぐらゐだつた。海はすさまじい響きを立て、山のやうな波を岸に打ち寄せた。

安藝町に來た。成ほど一地方の豪族の割據するに足りるやうな地形だつた。ぐるりと三面を取巻いた山の中からは、一條の川が流れ落ちて、それに寄るやうにしてその安藝氏の古城趾があり、それと向ひ合つて、その滅亡の悲劇のあとを留めた菩提寺と墳墓とがあつた。私たちはN君の好意で、その古い三つの墳墓をも弔ふことが出来たことを感謝したい。

安藝の町は後免、赤岡などは感じが丸で違つてゐた。もつと靜かてそして落ついてゐた。更にいひ換れば、その戰國時代の空氣が未だにどこかに沈んだまゝ、巴渦を巻いてゐるやうな氣のするところだつた。私たちの晝飯を取

つた旅舎は、町の左側の中ほどのところだつたが、その二階の一間からは、海があまりに近くもなくまた遠くもない程度に見えて、涼しい海風が袂にみなぎるばかりに吹いた。そこで私は初めてN君に會ひ、そのN君が芥川氏と同學であつたことを知り、しばしはその追憶談で時を移した。私は昨夜も高知市で芥川氏の自殺について大勢の人達を前にしてまじめに話したことなどを、もそこに持ち出した。

『何うです、君も一緒に行きませんか』後にはかう私達はN君に勧めた。

岩崎彌太郎の昔の邸あそこにも、その安藝氏の古い墳墓をたづねた時に行つた。私は九州の中津にある福澤諭吉の邸あそこを思ひ出した。そしてかういふ昔の人の宅が今日まで残つてゐるといふことの上一種のなつかしさを感

た。安藝氏の墳墓では、

『君臣之義足千古、荒草相憑三古墳』

といふ轉結を、岩崎氏の邸宅では、

『茅茨修宅今猶在、紅發凌霄照眼明』

といふ句を得たことをこゝに書いて置きたい。

そこからはN君も一緒になつて出發した。

伊尾木の洞窟が來た。それは室戸岬の植物の序説を成してゐるやうなところださうだ。洞窟は街道に向つてその大きな穴を開いてゐた。その穴はさう大して深くはなかつたけれども——奥がずっとトンネルのやうにこつちから向うに交通してゐるやうになつてゐるけれども、それでも仔細に觀察す

ると非常にめづらしい亞熱帯植物が澤山にそこにあるといふことだつた。私はつたやかつらの長く碧にたれ下つてゐるのを見た。また馬目柏の細かにはふやうにそこに密生してゐるのを見た。それにその洞窟の中は涼しかった。清水が崖からポタポタと滴り落ちてゐた。

入口の川の幅が廣いので、それをわたりかねてゐると、N君は私が負つて上げませうというてその肩をかしてくれた。ゆきにも歸りにも……。『随分重いてせう』「何しろ、二十三貫もあるつていふんだから……」こんな言葉が一時あたりをにぎやかにした。

奈半利、羽根、吉良川、浮津——それは私には生面の地ではあつたけれども、しかもかなり深くそこに住んでゐる人達の生活に入つてゆけるやうな

気がした。それはほかでもなかつた。私は室津鯨太郎の『南國』を讀んでゐるからであつた。否、その『南國』を私が讀んでゐなかつたならば、或はその室戸岬一帯の地もそれほど深く私を惹き寄せなかつたかも知れないのだつた。だんく近づいてゆくにつれて、私は故郷にても歸つて行くやうな親さをあたりを感じ出した。

行當の鼻を廻ると、もはやそこは室戸岬の領分だつた。西寺に參詣する路がそのあたりからわかれて、前には室戸町の瓦甍の不揃ひにつらなつてゐるのが指さされた。漁村らしい潮の香が幅の狭い通に満ちて、碧い海がそこから覗かれた。山から落ちて來た川には橋がかゝつてゐて、そこでは『南國』に出て來るやうな娘達が裾をかゝげて頻に物を洗つてゐるのを目にし

た。

私達は油屋といふ旅舎の前で一度やどをきめるために下りたが、茶を一杯のむとすぐまた出かけた。何は置いても先づ岬端を見ずにはゐられなかつたのである。徒崖にそつた道。水田の向うに海の鳴つてゐるやうな道。ここにあたりの緑の美しさには私は心を惹かれずにはゐられなかつた。それに、『土佐日記』の作者がこの海岸を小舟で縫つて来たといふ形が、大湊からこゝに来て、羽根、浮津などにそのあとをこゞめて、好い風が得られないために幾日もこのあたりに碇泊してゐたといふ形がたまらなく私をなつかしがらせた。さつき羽根の鼻を前にした時にも、『さうかな……やつぱり見やうによつては鳥の翼に見えるかな……。昔の人はおもしろい見方をしたものだ』など

と語り合つたが、それほど都が戀しく、一刻も早く舟出をしたいにも風が悪く、いので何うすることも出来なかつた當時の懊惱がそれこそその歌の中にあつてゐるのがこゝに来てはじめてはつきりと呑み込めた。何でもその滞留したといふ當時の室津は、今の室戸町ではなくて津呂港であるらしいなどとM君は説明した。

津呂の役場の前からは、これもやつぱり私達を案内するための助役が同乗した。自動車はすぐ疾走した。

海上から見、手結の山の上から見、それからずっと望み通しに望んで来た大きなテーブルの形をした徒崖はすでに私達の前に来てゐるのだつた。私達の心はをどつた。

それにしても何といふにぎやかさをこの海岸は持つやうになつたのであらう。これがかねて想像してゐた南海の一絶岬か。またかねて想像してゐた岬端のさびしい路か。そこには乗合自動車のりあひじどうしやが阿波あはの小松島こまつじまと高知市かうちしとの間あひだを絶えず往来おうらいして、遊覧ゆうらんの客きやくが常に陸りくとしてあそこを絶たないではないか。沿道えんどうの五つ六つの子供こどもでさへ、自動車じどうしやが通とほる度たびに手てを高くあげて、『ハイヤアが来た——』といつて歡呼くわんこの聲こゑを擧あげてゐるではないか。思おもひもかけないこのひらけ方かたを土地ちちの人達ひとたちですら、目めをみはつて見てゐるといふ形かたちではなかつたか。

山やまの方はあと廻まはしにして、私達わたしたちの自動車じどうしやはまつしぐらに岬端さきたんへと向むかつて進すすんだ。

やがて白色はくしよくの標柱へうちゆうの立たつてゐるあたりに行いつて、私達わたしたちは自動車じどうしやを下おりることにした。

『ふむ、かういふところかな……好よいところだな』こんなことをいひながら私達わたしたちは静しづかに並ならんで歩あるいた。岩石がんせきのそばだつてゐる間あひだを、海うみがあれた時ときにはさぞ波濤なみが道路どうろの上うへを洗あらふてあらうと思おもはれるやうなところを、目めの前まへはすぐ怒濤どとうである海岸かいがんを、亞熱帯あねつたいの植物しよくぶつが濱はまゆふを、芦竹あしたけを、梧桐林ごどうりんを、馬目柏うまめかしはを、榕樹ようじゆを、そここゝに碧みどりに點綴てんてつしてゐる間あひだを。そして私達わたしたちはたうとうその岬みさきの絶端ぜつたんとも思おもはれるところに行いつて立たつた。

そこでは路みちが大きな巖石がんせきの間あひだをつらぬいて、くるりと向むかうへ廻まはるやうになつてゐた。

「あ、こゝいらがてうど室戸岬の絶端になるんだね」すさまじく濤のあがつたり砕けたりする大きな巖石に身をよせるやうにして、私はちつと海を眺めた。

三

私は不思議な気がした。これが岬端かといふ気がした。どこにかうした開けた整理された岬端があるだらう。自動車ですうと駛つて通つて行くやうな岬端があるだらう。なるほどこれが八景に選ばれた大きな理由のひとつかも知

知れない。どんなすぐれた風景でも、交通が十分でなければ世間の多くの人達の玩賞を買ふことは出来ない。さうかといつて、その交通のためには、あつたが俗化されたり破壊されたりしたのは困るが、こゝではさうした憂ひはない。俗化されるにはあまりに風景が雄大すぎる。また密生してゐる樹木があまりに群を抜き類を絶してゐる。

南國の果てといふ感じがひしと私に逼つて来た。九州の東南の沿岸、たごへば日向の青島とか、大隅の南の海上にある蒲葵島とか、さういふところに私は行つて見て知つてゐるけれども、そこにもいろくめづらしい亞熱帯の植物はあつたけれども、しかも多くは蕞爾たる一島で、とてもこの岬端のゆたかな、碧にはちよぶべくもなかつた。岬の一端を蔽つてゐる梧桐の自然

林、あたりに細かくはふやうに密生してゐる馬目柏、驚かるゝ大きさを以てそここゝに、その枝を地上に落してゐる榕樹、ところどころにまじつてひとりてに生えてゐる大きな蘇鐵。さうした學問に疎い私にはとても細かに記述することは出来なかつたけれども、しかもその碧の雲の靡いてゐるやうな岬端を縁どつて鐵色をした奇巖が並び、そのすぐ向うに白く碎けた怒濤が翻つてゐるといふことは、立派なひとつの繪卷の中のシインとするに足りはしないか。こゝでは海の荒くないのを、また岬端の峻しくないのを、徒崖の高く大きくないのを、決してその弱點とするには足りなかつた。色彩の美、碧の美といふものを私はそこから十分に學ぶことが出来たやうな氣がした。そしてこの碧の徒崖を縁づけるやうにして、灌頂の濱だとか、目洗の池だ

とか、龍宮岩だとか、月見濱の濱だとか、または大師一夜建立の岩屋だとか、水掛地藏だとか、弘法修法の大岩屋だとかいふものがいたるところに散點してゐるのだつた。否、濱といつても、巖と巖との間を二三十歩をつたへば、忽ちにして怒濤の翻つてゐるところへと出て行けるのだつた。

月見濱といふのは、その岬端をぐるりと廻つて、一二町向うへ行つたころにあつた。

『月の晩には、此處は非常に好いですよ……。全く別世界に來たやうな氣がしますよ。この間は、丁度月がありましたね。みなしてやつて來ましたが、この前の山と海との對照が非常に好い、つまりわるくさびしくないところが、好いですね。』

『さうですね。』私は考へるやうにして、『こゝばかりではない、この岬端は一體に、自然の庭園といつたやうな感じてですね。それも貴重な、珍奇な、とても他に見られないやうなエキゾチックな庭園——ちよつと日本にはめづらしし……』

『さうですね。』

『これで、鳥なんかにもつとめづらしい色彩の翼でも持つてゐるものが飛んでゐたら、一層好いだらうと思ひますね』

私達はこんなことをいひながら靜かに歩いた。私の頭には不思議にも外國の名畫などが浮んで來てゐた。遠くから想像してやつて來たものは丸で違つてはゐたけれども、しかも私はその違つた中にまたいふにはれない獨得

のカラーのあるのをさがし得たことを喜んだ。またかうしたためづらしいハイカラな光景が、日本八景の一つを占め得たことを喜んだ。

岬端といふものを私はこれまでかなり多く見て來た。日向の鵜戸、あそこもちよつと面白い。伊豆の石廊、あの絶壁は天下の偉觀だ。志摩の御座、この金比羅山から下を見た眺めは忘れられない。陸前の金華山の雄鹿の鼻も好いところだ。今またこゝに瀟洒なまたは高貴な、外國の庭園でも見たやうな碧色の一つのシインを私の旅の夢の中に加へ得たことを祝福したい。私は夏よりも春の方が此處は好いのではないかなども思つて見た。

この岬端をめぐつた岩石の奇は毘砂姑岩に至つてやゝ盡きた。これから先、佐喜濱、甲浦あたりまで多少の奇觀がないことはないさうだけれども、しか

し私はそこまでは行つて見なかつた。それにあいにくその日は夕立がやつて来た。私達は一先づ室戸町の旅舎の方へと戻つて来た。

あくる日は早くから出かけた。今度は山を見ようとしたのである『やつぱり山の方が好いてすな……。海岸だけでは室戸岬を見たとはいへませんな』かう脅つて菊池幽芳君がいつたことがあつたのを私は記憶してゐるのである。津呂の町を離れて七八町行つたところから左に入る。路はかなりにわるい。樹木や竹なども非常に深く茂つてゐる。四國遍路の中で殊に名高い最御崎寺の參詣道としてあまりに構はれてゐないやうな氣がした。一步毎に西の海が開けて、行當の鼻がそれと指さされるやうになつて行くのであつたけれども、草や樹が一面に淡く靡いてゐるのでのぞくやうにしなければ、とても十分に

それを見ることは出来なかつた。のぼりはかれこれ十町に近かつた。順路だからといつて先づ測候所へと志した。

岬端の燈台とか測候所とかいふものは概して感じの好いものだがこゝでも次第にさうした岬端に特有な低い松の林だの、珊瑚樹の葉の厚ぼつたい垣だの、馬鈴薯の畠だの、鈴虫や松虫の鳴いてゐる萱原だのがあらはれ出した。私達は裏門から入つて行つた。ちよつと町まで行つたとかで所長が不在で年の若い助手がひとりで大勢の客を相手にしてちよつと何うして好いのかわからないので困つてゐるやうだつた。私達はそこで冷たい水をもらつて何杯も飲んだ。

私は別に多くの期待を持つてゐたのでもなかつた。たゞ展望する場所が何

處かにありはしないか。何處に行つたつて、また何んな好いところだつて、展望する場所が一番必要なのだ。犬吠あたりだつて、あの愛宕山の眺望がなければ遊覽者の十の八九は失望して歸つて行つてしまふに相違ないのである。しかし此處ではそれが何處にもない。寺は全く密樹の中に埋もれつくしてゐるし、燈台だつて、南の一方は眺めることは出来るけれども、とてもその全景を見ることは出来ない。現に大阪から高知に來る汽船の中でも、その事務長がそれを指摘して、そこに展望の場所のないことを深く深く惜しんでゐた。そのため私は測候所の中にもそれを求めなければ、とても他に求めることが出来ないと思つて、身體が肥つてそれを自分でも持てあつかつてゐるほどなのにも拘らず、高い鐵の階子を攀ぢ、穴のやうな狭いところをくゞつてや

つこの思ひで、その一番高い風力測量台の上へと登つて行つたのだつた。

思はず私は聲を擧げた。果して私の考へた通りであつたのである。そこに來て私は初めてその願ひを満たすことが出来たのである。それは海岸の路も美しい。波濤も岩石もわるくはない。樹木の碧色はここに忘れ難い。しかしこの展望に接せずには、折角室戸岬を見に來た甲斐がないといへないことはなかつた。その眺めは非常に潤かつた。また非常に雄大だつた。そこからは甲浦どころではない。ずつと向うの阿波の牟岐浦あたりまでの長汀曲浦を指點することが出来た。また西の方では、行當、羽根、大山の三つの鼻のテールのやうに、形よく並んでゐるさまを手に取り見るやうにすることが出来た。南は際涯なき大海、東は紀州の潮岬の鼻のかすかに長く黛のやうにつらな

つて海に盡きて行つてゐるのを目にした。

『これで満足した。これで室戸岬が本當に呑み込めた。好いな……。何ともいへんな。やつぱり立派に八景の一たるに足りるな！』私は棒立に立つたまゝこんなことを何遍となくいつた。容易にそこから下りて来ようとはしなかつた。

『外國から来る飛行機は、皆この岬端の凹んだところをこつちから向うに越して行きますよ』やつぱりあたりを眺めて立つてゐた室津のR君はいつた。私は一層岬の大きさを感じた。わだつ海の大きな氣息をそこに聞き得たやうな氣がした。

その二三日後には、私はずつと南して、室戸と共にこの土佐の兩脚を成し

てゐる足摺岬の東端の徒崖の中をずつと此方へと歩いて来てゐた。

その日はかなりな暴風雨だった。龍串を遊覽して歸りに足摺に寄港する筈の團體の汽船もたうそうその岸にその船を着けることが出来なくて、やむなく引返して行つたほどだった。私は私で西海岸の大濱と松尾との間に横たはつた大きな岬をあへぎくのぼつた。傘は持つてゐたけれども、吹降なので全身ぐしよぬれになった。休むところも茶を飲むところもなかつた。何となく昔の青年期にてもかへつたやうな氣がした。その岬にかゝる手前では、濱に路がなく、下に怒濤のあれてゐるのを目にしながら、ふるへをのゝく心を押へて、すべる巖をわたつて行つた。大きなすさまじいあれた海が常に私とともにあつた。崖の中に深くのぞかれる眞白になつてゐる淵。岬の尾根からは

るかに見わたされる龍串方面の怒濤。松尾の集落の中の祠にある大きな榕樹。それでも峠を越した時分からはいくらか小降になつて、伊佐に向つて歩く時分には、ちよつと日影が漏れて海が一時美しく輝いたりした。このあたりは非常に好かつた。雄大でそして佳麗である。志摩の御座半島をもつとぐつと大きくしたやうな感じてある。そのくせ、足摺の岬端は、室戸岬と違つて、行つても行つてもその形をあらはさないものであつた。海上からは無論それと指點することは出来たであらうけれども陸を行つたのではすぐその近くまで行かなければ岬端といふ感じが起らなかつた。否、そこにある金剛福寺ですら、室戸岬の東寺、西寺のやうに相当山の高いところにあるのではなくて、通りから二三十歩も入れば、もはやそこは寺であるのであつた。従つて

岬端に行きさへすれば、室戸岬のやうに再び山に登つて寺に達するといふ勞苦を再びしないで好かつた。そしてその路の盡きたところに柵に似た門と古びたペンキ塗の家屋が見えてゐて、それが足摺岬の望樓であつた。しかしそこまで來ても、それが土佐の兩脚の一脚で、日本でももつとも南に突き出してゐる岬頭だなどといふ感じは少しもしなかつた。さうかといつてあたりの浅いのはなかつた。今度公園になるとかいつて篠竹などを刈つてゐたが、その縁を縁どつてゐる路を向うに出ると、そこには何ともいへないほど見事な怒濤が徒崖と絶壁とに當たつて碎けてゐるのである。「うむ、波と巖とは、こつちの方が好いな……これは立派なものだ」かう私は私と一緒に行つたI君にいはずにはゐられなかつた。